

# 大和路・信濃路

堀辰雄

青空文庫



## 樹下

その藁屋根わらやねの古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小径こみちのかたわらに、一体の小さな苔蒸こけむした石仏が、笹むらのなかに何かしおらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光つて見えている。いずれ観音像かなにかだろうし、しおらしいなどとはもつてのほかだが、——いかにもお粗末なもので、石仏といつても、ここいらにはざらにある脆もろい焼石、——顔も鼻のあたりが欠け、天衣てんねなどもすっかり磨滅し、そのうえ苔がほとんど半身を被おおつてしまつてしているのだ。右手を頬にあてて、頭を傾げかして、その姿がちよつとおもしろい。一種の思惟象しゅいぞうとでもいうべき様式なのだろうが、そんなむずかしい言葉でその姿を言いあらわすのはすこしおかしい。もうすこし、何んといつたらいいか、無心な姿勢だ。それを拝しながら過ぎる村人たちだつて、彼等の日常生活のなかでどうかした工合でそういういた姿勢をしていることもあるかも知れないような、親しい、なにげなさなのだ。……そんな笹むらのなかの何んでもない石仏だが、その村でひと夏を過ごして、いつかその石仏のあるあ

たりが、それまで一度もそいつたものに心を寄せたことのない私にも、その村での散歩の愉しみのひとつになつた。ときどきそこいらの路傍から採つてきたような可憐な草花が二つ三つその前に供えられることがある。村の子供らのいたずららしい。が、そんなのではない、もうすこしちゃんとした花が供えられ、お線香なども上がつていたことも、その夏のあいだに二三度あつた。

「お寺の裏の笹むらのなかに、こう、ちょっとおもしろい 恰好かっこうをした石仏があるでしょ  
う？ あれはなんでしようか？」夏の末になつて、私はその寺のまだ四十がらみの、しか  
しもう鋭く瘦せた住職からいろいろ村の話を聴いたあとで、そう質問をした。

「さあ、わたしもあるの石仏のことは何もきいておりませんが、どういう由緒のものですか  
な。かたちから見ますと、まあ によいりんかんのん如意輪觀音にちかいものかと思いますが。……何しろ、  
ここいらではちょっと類のないもので、おそらく石工がどこかで見覚えてきて、それを無  
邪氣に真似でもしたのではないでしようか？……」

「そういうこともあるんですか？ それはいい。……」私にはその説がすっかり気に入つた。たしかに、その像をつくつたものは、その形相の意味をよく知つていてそう造つたのではない。ただその形相そのものに対する素朴な愛好からそういうものを生んだのだ。そうしてその故に、——そこにまだわずかにせよ残つているかも知れない原初の崇高な形相にまで、私のようなものの心をあくがれしめるのであろうか？ こんないかにもなにげない像ですら。……

「ときどきお花やお線香などが上がつてゐるようですが、村の人たちはあの像にも何か特別な信仰をもつてゐるのですか？」

最後に私はそんなこともきいてみた。

「さあ、それもいつごろからの事だか知りませんけれど、わりに近頃になつてからだそうですが、歯を病む子をつれて、村の年よりもがよく拝みに来ます。」そういうてその住職は笑つた。

「あの指先で頬を支えている思惟の相が、村びとにはなんのことやら分からなくつて、いつもそんな俗信を生むようになつたと見えますな。」

「それはいくら何んでも……」そう言いかけたが、しかしそのまま私は口をつぐんで、こ

れから秋になつて、夜ごとに虫がすだいで啼きはじめるあの笹むらのなかで、相変らず、じいと小さな頭を傾げているだろうその無心そうな像を、ふいと目のうちに蘇よみがえらせた。いつのまにこの像がこんなに自分にとつて親しみのあるものになつてしまつたのだろうと訝いぶかりながら。……

それから数年立つて、私もときどき大和のほうへ出かけては、古い寺や名だかい仏像などを見て歩いたりするようになつたが、そんな旅すがら、路傍などによく見かける名もない小さな石仏のようなものにも目を止めるようにしていた。そういうものの中には私の心を惹くようなものもかなりあるにはあつたが、数年前信濃の山のべの村で見つけたあんなような味わいのあるものは一つも見出せなかつた。そして、私はときどきあの笹むらのなかで小さな頭を傾げていた観音像を好んで思いだしていた。もとより旅にあつてはほどよく感傷的になるのも好いとおもつてゐる私のことだから、それが单なる自己の感傷に過ぎなくとも、それもそれで好いとおもつていた。

云つてみれば、それはそれまで何年かその山ちかい村で孤独に暮らしていた自分をもその一部とした信濃そのものに対する一種のなつかしさでもあろうし、又、こうやつて大和の古びた村々をひとりでさまよい歩いているいまの自分の旅すがたは旅すがたで、そんな数年前の何か思いつめていたような自分がそういつたはかないものにまで心を寄せながら、いつかそれを通してひそかにあくがれていたものでもあつたのであろう。ともかくも、その箇むらのなかの小さな思惟像は、何かにつけて、旅びとの私にはおもい出されがちだった。

或る秋の日にひとりで心ゆくまで拝してきた中宮寺<sup>ちゅうぐうじ</sup>の観音像。——その観音像の優しく力づよい美しさについては、いまさら私なんぞの何もいうことはない。ただ、この観音像がわれわれをかくも惹きつけ、かくも感嘆せしめずにはおかない所以の一つは、その半跏思惟<sup>はんかしゆい</sup>の形相そのものであろうと説かれた浜田博士の闊達<sup>かつたつ</sup><sub>ゆえん</sub>な一文は私の心をいまだに充たしている。その後も、二三の学者のこの像の半跏思惟の形の発生を考察した論文など

を読んだりして、それがはるかにガンダラの樹下思惟像あたりから発生して来ているとう説などもあることを知り、私はいよいよ心に充ちるものを感じた。

あのいかにも古拙なガンダラの樹下思惟像——仏伝のなかの、太子が樹下で思惟三昧の境にはいられると、その樹がおのずから枝を曲げて、その太子のうえに蔭をつくつたという奇蹟を示す像——そういう異様に葉の大きな一本の樹を装飾的にあしらつた、浅浮彫りの、数箇の太子思惟像の写真などをこの頃手にとつて眺めたりしているときなど、私はまた心の一隅での信濃の山ちかい村の寺の小さな石仏をおもい浮かべがちだつた。

一つの思惟像として、瞑想の頬杖をしている手つきが、いかにも無様なので、村人たちには怪しい迷信をさえ生じさせていたが、——そのうえ、鼻は欠け落ち、それに胸のあたりまで一めんに苔が生えていて、……そういえば、そんなにそれが苔づくほど、その石仏のあるあたりは、どんな夏の日ざかりにもいつも何かひえびえとしていて、そこいらまで来ると、ふいと好い気もちになつてひとりでに足も止まり、ついそのままそこの笹む

らのなかの石仏の上へしばらく目を憩わせる。と、苔の肌はしつとりとしている。ちよつとそれを撫でてみたくなるような見事さで。——そう、いまの今までそれに気がつかなかつたのは、いや、気がついていてもそれを何とも思わずにはいたのは随分迂闊うかつだが、あそこは何かの大きな樹の下だつたにちがいない。——すこし離れてみなれば、それが何んの樹だかも分からぬほどの大木だつたのだ。あの頬杖をしている小さな石仏のうえにちらちらしていた木洩れ日も、よほど高いところから好い工合に落ちてきていたので、あんなに私を夢み心地にさせたのだつたろう。

あれは一体、何んの樹だつたのだろうか?……そんなことをおもいながら、私はふと樹下思惟という言葉を、その言葉のもつ云いしれずなつかしい心像を、身にひしひしと感じた。あれは一体、何んの樹?……だが、あの大きな樹の下で、ひとり静かに思惟にふけつていたもの——それはあの笹むらのなかに小さな頭を傾げていた石仏だつたろうか?それとも、それに見入りながらその怪しげな思惟像をとおしてはるか彼方のものに心を惹ひかれていた私のほうではなかつたろうか?

それにしても、あそこには、——あの何やらメエルヘンめいた石仏の前には、いまだにあの愚かな村びどもの香花が絶えないだろうか? 子供たちがそこの路傍から摘ん

でくるかわいらしい草花だけならいいが……

## 十月

### 一

一九四一年十月十日、奈良ホテルにて

くれがた奈良に著いた。僕のためにとつておいてくれたのは、かなり奥まつた部屋で、なかなか落ちつけそうな部屋で好い。すこしお仕事をするのには僕には大きすぎるかなと、もうここで仕事に没頭している最中のような気もちになつて部屋の中を歩きまわつてみたが、なかなか歩きでがある。これもこれでよかろうという事にして、こんどは窓に近づき、それをあけてみようとして窓掛けに手をかけたが、つい面倒になつて、まあそれくらいはあすの朝の楽しみにしておいてやれとおもつて止めた。その代り、食堂にはじめて出るま

えに、奮発してひげを剃ることにした。

### 十月十一日朝、ヴエランダにて

けさは八時までゆつくりと寝た。あけがた静かで、寝心地はまことにいい。やつと窓を開けてみると、僕の部屋がすぐ荒池に面しているだけは分かつたが、向う側はまだぼおつと濃い靄もやにつつまれているつきりで、もうちよつと僕にはお預けという形。なかなかもつたいぶつていやあがる。さあ、この部屋で僕にどんな仕事が出来るか、なんだかこう仕事を目の前にしながら嘘たのみたいに嬉しい。きょうはまあ軽い小手しらべに、ホテルから近い新薬師寺ぐらいのところでも歩いて来よう。

### 夕方、唐招提寺にて

いま、唐招提寺とうしょうだいじの松林のなかで、これを書いている。けさ新薬師寺のあたりを歩きながら、「城門のくづれてゐるに馬酔木かな」という秋桜子の句などを口ずさんでいるうちに、急に矢も楯たてもたまらなくなつて、此処に来てしまつた。いま、秋の日が一ぱい金堂や講堂にあたつて、屋根瓦やねがわらの上にも、丹にの褪さめかかった古い円柱にも、松の木の影が

鮮やかに映っていた。それがたえず風にそよいでいる工合は、いうにいわれない爽やかさだ。此処こそは私達のギリシアだ——そう、何か現世にこせこせしながら生きているのが厭になつたら、いつでもいい、ここに来て、半日なりと過ごしてのこと。——しかし、まず一番先きに、小説なんぞ書くのがいやになつてしまることは請合いだ。……はつはつは、いま、これを読んでいるお前の心配そうな顔が目に見えるようだよ。だが、本当のところ、此処にこうしていると、そんなはない仕事にかかわっているよりか、いつそのこと、この寺の講堂の片隅に埃ほこりだらけになつて二つ三つころがつている仏頭みたいに、自分も首から上だけになつたまま、古代の日々を夢みていたくなる。……

もう小一時間ばかりも松林のなかに寝そべつて、そんなはかないことを考えていたが、僕は急に立ちあがり、金堂こんどうの石壇の上に登つて、扉の一つに近づいた。西日が丁度その古い扉の上にあたつてゐる。そしてそこには殆ど色の褪あせてしまつた何かの花の大きな文様ようが五つ六つばかり妙にくつきりと浮かび出でている。そんな花文のそこに残つてゐることを知つたのはそのときがはじめてだつた。いましがた松林の中からその日のあたつてゐる扉のそのあたりになんだか綺麗な文様らしいものの浮き出でているのに気がつき、最初は自分の目のせいかと疑つたほどだつた。——僕はその扉に近づいて、それをしげしげと見入

りながらも、まだなんとなく半信半疑のまま、何度もその花文の一つに手でさわってみようとしかけて、ためらつた。おかしなことだが、一方では、それが僕のこのとききりの幻であつてくれればいいというような気もしていたのだ。そのうちそこの扉にさして いた日のかけがすうと立ち去つた。それと一しょに、今まで鮮やかに見えていたそのいくつかの花文も目のまえで急にぼんやりと見えにくくなつてしまつた。

### 十月十二日、朝の食堂で

けさはもう六時から起きている。朝の食事をするまえに、大体こんどの仕事のプランを立てた。とにかく何処か大和の古い村を背景にして、Idyll風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉集的な氣分を漂わせたいものだとおもう。——ちよつと待つた、お前は僕が何かというとすぐイデイルのようなものを書きたがるので、またかと思つていることだろう。しかし、本当をいうと、僕は最近ケーベル博士の本を読みかえしたおかげで、今までいい加減に使つていたそのイデイルという様式の概念をはじめてはつきりと知つたのだよ。ケーベル博士によると、イデイルというのは、ギリシア語では「小さき絵」というほどの意だそうだ。そしてその中には、物静かな、小ぢんまりとした環境に生きて

いる素朴な人達の、何物にも煩わせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されている。……どうだ、分かつたかい、僕がそれより他にいい言葉がなかつたので半ば間にあわせに使つていたイデイルというのが、思いがけず僕の考えていたものとそつくりそのままなのだ。もうこれからは安心して使おう。いい訳語が見つかってくれればいいが（どうも牧歌なんぞと訳してしまつてはまずいんだ）……

さて、お講義はこの位にしておいて、こんどの奴はどんな主題にしてやろうか。なんしろ、万葉風となると、はじめての領分なのだから、なかなかおいそれとは手ごろな主題も見つかるまい。そのくせ、一つのものを考え出そうとすると、あれもいい、これもちよつと描けそうだ、と一ぺんにいろんなものが浮かんで来てしまつてしまふがいい。

まことに、きょうは一日中、何処か古京のあとでもぶらぶら歩きながら、なまじつかこつちで主題を選ぼうなどとしないで、どいつでもいい、向うでもつて僕をつかまえるような工合にしてやろう。……

僕はそんな <sup>おおよう</sup> 大様な氣もちで、朝の食事をすませて、食堂を出た。

午後、海竜王寺にて

天平時代の遺物だという転害門から、まず歩き出して、法蓮というちよつと古めかしい部落を過ぎ、僕はさもいい気もちそうに佐保路に向い出した。

此処、佐保山のほとりは、その昔、——ざつと千年もまえには、大伴氏などが多く邸宅を構え、柳の並木なども植えられて、その下を往来するハイカラな貴公子たちに心ちのい樹蔭をつくつていたこともあつたのだそうだけれど、——いまは見わたすかぎり茫々とした田圃で、その中をまつ白い道が一直線に突つ切つているつきり。秋らしい日ざしを一ぱいに浴びながら西を向いて歩いていると、背なかが熱くなつてきて苦しい位で、僕は小説などをゆつくりと考へていて歩いていると、漸つと法華寺村に著いた。

村の入口からちよつと右に外れると、そこに海竜王寺という小さな廃寺がある。そこの古い四脚門の陰にはいつて、思わずほつとしながら、うしろをふりかえつてみると、いま自分の歩いてきたあたりを前景にして、大和平一帯が秋の収穫を前にしていかにもふさふさと稲の穂波を打たせながら拡がつてゐる。僕はまぶしそうにそれへ目をやつていたが、それからふと自分の立つている古い門のいまにも崩れて来そうなのに気づき、ああ、この明るい温かな平野が廃都の跡なのかと、いまさらのように考へ出した。

私はそれからその廃寺の八重葎の茂つた境内にはいつて往つて、みるかげもなく荒れ

果てた小さな西金堂（これも天平の遺構だそうだ……）の中を、はずれかかつた櫛子ごしにのぞいて、そこの大平好みの化粧天井裏を見上げたり、半ば剥落した白壁の上に描きちらされてある村の子供のらしい樂書を一つ一つ見たり、しまいには裏の扉口からそつと堂内に忍びこんで、磚のすき間から生えている葎までも何か大事そうに踏まえて、こんどは反対に櫛子の中から明るい土のうえにくつきりと印せられている松の木の影に見入つたりしながら、そう、——もうかれこれ小一時間ばかり、此處でこうやつて過ごしている。女の来るのを待ちあぐねている古の貴公子のようにわれとわが身を描いたりしながら。：

夕方、奈良への帰途

海竜王寺を出ると、村で大きな柿を二つほど買って、それを皮ごと噉りながら、こんどは佐紀山らしい林のある方に向つて歩き出した。「どうもまだまだ駄目だ。それに、どうしてこうおれは中世的に出来上がつてゐるのだろう。いくら天平好みの寺だといつたつて、こんな小つちやな寺の、しかもその廃頽した氣分に、こんなにうつつを抜かしていたのでは。……こんな事では、いつまで立つても万葉氣分にはいれそうにもない。まあ、せい

せい何処やらにまだ万葉の香りのうつすらと残つてゐる伊勢物語風なものぐらゐしか考えられまい。もつと思ひきりうぶな、いきいきとした生活氣分を求めなくつては。……」そんなことを僕は柿を噛り噛り反省もした。

僕はすこし歩き疲れた頃、やつと山裾の小さな村にはいつた。うたひめ歌姫うたひめという美しい字名あざなだ。こんな村の名にしてはどうもすこし、とおもうような村にも見えたが、ちよつと意外だつたのは、その村の家がどれもこれも普通の農家らしく見えないのだ。大きな門構えのなかに、中庭が広くとつてあつて、その四周に母屋も納屋も家畜小屋も果樹もならんでいる。そしてその日あたりのいい、明るい中庭で、女どもが穀物などを一ぱいに拡げながらのんびりと働いている光景が、ちよつとピサロの絵にでもありそうな構図で、なんとなく  
フランス仏蘭西あたりの農家のような感じだ。

ちよつとその中にはいつて往つて、女どもと、その村の聞きとりにくいやうな方言かなんかで話がしてみたかつたのだけれど、気軽にそんなことの出来るような性分ならいい。僕ときたひには、そうやつて門の外からのぞいているところを女どもにちらつと見とがめられただけで、もうそこには居たたまれない位になるのだからね。……

気の小さな僕が、そうやつて農家の前に立ち止まり立ち止まり、二三軒見て歩いている

うちに、急に五六人の村の子たちに立ちよられて、怪訝けげんそうに顔をじろじろ見られだしたのには往生した。そのあぐく、僕はまるでそんな村の子たちに追われるようにして、その村を出た。

その村はずれには、おあつらえむきに、鎮守の森があつた、僕はどうとう追いつめられるように、その森のなかに逃げ込み、そこの木蔭でやつと一息ついた。

十月十三日、飛火野にて

きようは薄曇つているので、何処へも出ずこしに自分の部屋に引き籠ひこもつたまま、きのうお前に送つてもらつた本の中から、ギリシア悲劇集ひげきしゆうをとりだして、それを自分の前に据え、別にどれを読み出すといふこともなしにあちらこちら読んでいた。そのうち突然、そのなかの一つの場面が僕の心をひいた。舞台は、アテネに近い、或る村はずれの森。苦しい流浪の旅をつづけてきた父と娘との二人づれが漸つといまその森まで辿りついたところ。盲い老人が自分の手をひいている娘に向つて、「此處はどこだ」と聞く。旅やつれのした娘はそれでも老父を慰めるようにこたえる。「お父う様、あちらにはもう都の塔が見えまする。まだかなり遠いほどでございますが、ここでござりますか、ここはなんだかこう神

さびた森で。……」

老いたる父はその森が自分の 終焉の場所であるのを予感し、此処にこのまま止まる決心をする。

その神さびた森を前にして、その不幸な老人の最後の悲劇が起ろうとしているらしいのを読みかけ、僕はおぼえず異様な身ぶるいをした。僕はしかしそのときその本をとじて、立ち上がった。このまま此の悲劇のなかにはいり込んでしまつては、もうこんどの自分の仕事はそれまでだとおもつた。……

こういうものを読むのは、とにかくこんどの可哀らしい仕事がすんでからでなくては。  
——そう自分に言つてきかせながら、僕はホテルを出た。

もう十一時だ。僕はやつぱりこちらに来ているからには、一日のうちに何か一つぐらいはいいものを見ておきたくなつて、博物館にはいり、一時間ばかり彫刻室のなかで過ごした。こんなときにはひとつ何か小品で心愉しいものをじっくり味わいたいと、小型の飛鳥仏などを丹念に見てまわっていたが、結局は一番ながいこと、ちょうど若い樹木が枝を拡げるような自然さで、六本の腕を一ぱいに拡げながら、何処か遙かなところを、何かをこらえているような表情で、一心になつて見入つていてる阿修羅王の前に立ち止まつていた。

なんというういういしい、しかも切ない目ざしだろう。こういう目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示しているのだろう。

それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させていると、自分のうちにおのずから故しれぬ郷愁のようなものが生れてくる、——何かそういうふたノスタルジックなものさえ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない気もちになつて、やつとのことで、その彫像をうしろにした。それから中央の虚空藏菩薩を遠くから見上げ、何かこらえるように、黙つてその前を素通りした。

### 夜、寝床の上で

どうどう一日中、薄曇っていた。午後もまたホテルに閉じこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフオクレエスの悲劇を再びとりあげて、ずっと読んでしまった。

この悲劇の主人公たちはその最後の日まで何んという苦患<sup>くげん</sup>に充ちた一生を送らなければならぬのだろう。しかも、そういう人間の苦患の上には、なんの変ることもなく、ギリシアの空はほがらかに拡がっている。その神さびた森はすべてのものを吸い込んでしまうような底知れぬ静かさだ。あたかもそれが人間の悲痛な呼びかけに対する神々の答えでで

もあるかのように。――

薄曇つたまま日が暮れる。夜も、食事をすますと、すぐ部屋にひきこもつて、机に向う。が、これから自分の小説を考えようとすると、果して午後読んだ希臘悲劇ギリシアひげきが邪魔をする。あらゆる艱苦かんくを冒して、不幸な老父を最後まで救おうとする若い娘のりりしい姿が、なんとしても、僕の心に乗ってきてしまう。自分も古代の物語を描こうというなら、そういう気高い心をもつた娘のすがたをこそ捉まえようと努力しなくては。……

でも、そういうもの、そういう悲劇的なものは、こんどの仕事がすんでからのことだ、こんど、こちらに滞在中に、古い寺や仏像などを、勉強かたがた、僕が心懶こころのしく書こうというのには、やはり「小さき絵」位がいい。

まあ、最初のプランどおり、その位のものを心がけることにして、僕は万葉集をひらいたり埴輪はにわの写真を並べたりしながら、十二時近くまで起きていて、五つか六つぐらい物語の筋を熱心に立ててみたが、どれもこれも、いざ手にとつて仔細しきいに見てみると、大へんな難物のように思えてくるばかりなので、とうとう観念して、寝床にはいった。

十月十四日、ヴェランダにて

ゆうべは少し寐ねられなかつた。そうして寐られぬまま、仕事のことを考へてゐるうちに、だんだんいくじがなくなつてしまつた。もう天平時代の小説などを工夫するのは止めた方がいいような気がしてきた。毎日、こうして大和の古い村や寺などを見ていたからつて、おいそれとすぐそれが天平時代そのままの姿をして僕の中に蘇よみがえてくれるわけはないのだもの。それには、もうすこし僕は自分の土台をちゃんとしておかなくては。古代の人々の生活の状態なんぞについて、いまみたいにほんの少しあしか、それも殆ど切れ切れにしか知つていらないようでは、その上で仕事をするのがあぶなつかしくつてしようがない。それは、ここ数年、何かと自分の心をそちらに向けて勉強してきたこともしてきた。だが、あんな勉強のしかたでは、まだまだ駄目なことが、いま、こうやつてその仕事に実地にぶつかつて見て、はつきり分かつたというものだ。ほんの小手しらべのような気もちでとり上げようとした小さな仕事さえ、こんなに僕を手きびしくはねつけるのだ。僕はこのままそれに抵抗していくても無駄だろう。いさぎよく引っ返して、勉強し直してきた方がいい。……

そんな自棄やけぎみな結論に達しながら、僕はやつと明け方になつてから寐入つた。

それで、けさは大いに寐坊をして、髭ひげも剃らずに、やつと朝の食事に間に合つた位だ。きょうはいい秋日和あきびよりだ。こういうすがすがしい気分になると、又、元気が出てきて、

もう一日だけ、なんとか頑張つてやろうという気になつた。やや寐不足のようだが、小説なんぞ考えるのには、そういう頭の状態の方がかえつて幻覚的でいいこともある。

どうも心細い事を云い始めたものだと、お前もこんな手紙を見ては気が氣でないだろう。だが、もう少し辛抱をして、次ぎの手紙を待つていってくれ。何処でそれを書く事になるか、まだ僕にも分からぬ。……

### 午後、秋篠寺にて

いま、秋篠寺あきしのでらという寺の、秋草のなかに寐そべつて、これを書いている。いましがた、こここのすこし荒れた御堂にある伎芸天女ぎげいてんによの像をしみじみと見てきたばかりのところだ。このミュウズの像はなんだか僕たちのもののような気がせられて、わけてもお慕わしい。朱あかい髪をし、おおどかな御顔だけすっかり香こうにお灼やけになつて、右手を胸のあたりにもちあげて軽く印を結ばれながら、すこし伏せ目にこちらを見下ろされ、いまにも何かおつしやられそうな様子をなすつてお立ちになつていられた。……

此処はなかなかいい村だ。寺もいい。いかにもそんな村のお寺らしくしているところがいい。そうしてこんな何気ない御堂のなかに、ずっと昔から、こういう匂いの高い天女の

像が身をひそませていてくださつたのかとおもうと、本当にありがたい。

### 夕方、西の京にて

秋篠の村はずれからは、生駒山いこまやまが丁度いい工合に眺められた。

もうすこし昔だと、もつと侘びしい村だつたろう。何か平安朝の小さな物語になら、その背景には打つてつけに見えるが、それだけに、此処もこんどの仕事には使えそうもないとあきらめ、ただ伎芸天女と共にした幸福なひとときをきようの収穫にして。僕はもう何をしようというあてもなく、秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往つて見ようかと思つたりした。

が、道がいつか川と分かれ、ひとりでに西大寺駅さいだいじに出たので、もうこれまでと思い切つて、奈良行の切符を買つたが、ふいと気がかわつて郡山行の電車に乗り、西の京で下りた。

西の京の駅を出て、薬師寺の方へ折れようとするとつつきに、小さな切符売場を兼ねて、古瓦ふるがわらのかけらなどを店さきに並べた、侘びしい骨董店こつとうてんがある。いつも通りすがりに、ちよつと気になつて、その中をのぞいて見るのだが、まだ一ぺんもはいつて見たことがな

かつた。が、きょうその店の中に日があかるくさしこんでいるのを見ると、ふいとその中にはいつてみる気になつた。何か埴輪の土偶のようなものでもあつたら欲しいと思つたのだが、そんなものでなくとも、なんでもよかつた。ただふいと何か仕事の手がかりになりそうなものがそんな店のがらくたの中にころがつていはすまいかという空頼みもあつたのだ。だが、そこで二十分ばかりねばつてみていたが、唐草文様からくさもようなどの工合のいい古瓦のかけらの他にはこれといつて目ぼしいものも見あたらなかつた。なんばなんでも、そんな古瓦など買つた日には重くつて、持てあますばかりだろうから、又こんど来ることにして、何も買わずに出了。

裏山のかげになつて、もうここいらだけ真先きに日がかげつてゐる。薬師寺の方へ向つてゆくと、そちらの森や塔の上にはまだ日が一ぱいにあたつてゐる。

荒れた池の傍をとおつて、講堂の裏から薬師寺にはいり、金堂や塔のまわりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪そうりんを見上げて、その水煙すいえんのなかに透かし彫ぱりになつて一人の天女の飛翔ひしようしつつある姿を、どうしたら一番よく捉まえられるだろうかと角度など工夫してみていた。が、その水煙のなかにそういう天女を彫り込むような、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどきの人間の工夫しようとしてる事なんぞは何んと間が抜

けていることだと気がついて、もう止める事にした。

それから僕はもと来た道を引っ返し、すっかり日のかげつた築土道<sup>ついじみち</sup>を北に向つて歩いていた。二三度、うしろをふりかえつてみると、松林の上にその塔の相輪だけがいつもでも日に赫<sup>かがや</sup>いていた。

裏門を過ぎると、すこし田圃<sup>たんぼ</sup>があつて、そのまわりに黄いろい粗壁<sup>あらかべ</sup>の農家が数軒かたまつてゐる。それが五条<sup>ごじょう</sup>という床しい字名<sup>あざな</sup>の残つてゐる小さな部落だ。天平の頃には、恐らくこいらが西の京の中心をなしていたものと見える。

もうそこがすぐ唐招提寺の森だ。僕はわざとその森の前を素どおりし、南大門<sup>なんだいもん</sup>も往き過ぎて、なんでもない木橋の上に出ると、はじめてそこで足を止めて、その下に水草を茂らせながら気もちよげに流れている小川にじいつと見入りだした。これが秋篠川のつづきなのだ。

それから僕は、東の方、そいら一帯の田圃<sup>たんぼ</sup>ごしに、奈良の市のあるにまだ日のあつているのが、手にとるように見えるところまで歩いて往つてみた。

僕は再び木橋の方にもどり、しばらくまた自分の仕事のことなど考え出しながら、すこし気が鬱<sup>ふさ</sup>いで秋篠川にそうて歩いていたが、急に首をふつてそんな考えを払い落し、せつ

かくこちらに来ていて随分ばかばかしい事だと思いながら、裏手から唐招提寺の森のなかへはいつていった。

金堂も、講堂も、その他の建物も、まわりの松林とともに、すつかりもう陰つてしまっていた。そうして急にひえびえとしだした夕暗のなかに、白壁だけをあかるく残して、軒も、柱も、扉も、一様に灰ばんだ色をして沈んでゆこうとしていた。

僕はそれでもよかつた。いま、自分たち人間のはかなさをこんなに心にしみて感じていいられるだけでよかつた。僕はひとりで金堂の石段にあがつて、しばらくその吹き放しの円柱のかげを歩きまわっていた。それからちよつとその扉の前に立つて、このまえ来たときはじめて気がついたいくつかの美しい花文<sup>はなもん</sup>を夕暗のなかに搜して見た。最初はただそいらが数箇所、何かが剥<sup>はは</sup>げてでもしまつた跡のような工合にしか見えないでいたが、じいつと見ているうちに、自分がこのまえに見たものをそこにいま思い出してゐるのに過ぎないのか、それともそれが本当に見えてきたのか、どちらかよく分からぬ位の仄<sup>ほの</sup>かさで、いくつかの花文がそこにぼおつと浮かび出していた。……

それだけでも僕はよかつた。何もしないで、いま、ここにこうしているだけでも、僕は大へん好い事をしているような気がした。だが、こうしている事が、すべてのものがはか

なく過ぎてしまう僕たち人間にとつて、いつまでも好事ではあり得ないことも分かつていた。

僕はきょうはもうこの位にして、此処を立ち去ろうと思いながら、最後にちょっとだけ人間の氣まぐれを許して貰うように、円柱の一つに近づいて手で撫でながら、その太い柱の真んなかのエンタシスの工合を自分の手のうちにしみじみと味わおうとした。僕はそのときふとその手を休めて、じつと一つところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍った。そうやつてみていると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのりと温かい。その太い柱の深部に滲み込んだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残っているらしい。

僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅いでみた。日なたの匂いまでもそこには幽かに残っていた。……

僕はそうやつて何んだか氣の遠くなるような数分を過ごしていたが、もうすっかり日が暮れてしまつたのに気がつくと、ようやつと金堂から下りた。そうして僕はその儘まま、自分の何処かにまだ感ぜられている異様な温かみと匂いを何か貴重なもののようにかかえながら、既に真っ暗になりだしている唐招提寺の門を、いかにもさりげない様子をして立ち出でた。

## 一一

十月十八日、奈良ホテルにて

きょうは雨だ。一日中、雨の荒池をながめながら、折口博士の「古代研究」などを読んでいた。

そのなかに人妻となつて子を生んだ葛の葉という狐の話をとり上げられた一篇があつて、そこにこういう挿話が語られている。或る秋の日、その葛の葉が童子をあやしながら大好きな乱菊の花の咲きみだれでいるのに見とれているうちに、ふいと本性に立ち返つて、狐の顔になる。それに童子が気がつき急にこわがつて泣き出すると、その狐はそれつきり姿を消してしまう、ということになるのだが、その乱菊の花に見入つていてその狐のうつとりとした顔つきが、何んとも云えず美しくおもえた。それもほんの一とおりの美しさなんぞではなくて、何かその奥ぶかくに、もつともつと思ひがけないものを潜めているようにさえ思われてならなかつた。

僕も、その狐のやつに化かされ出しているのではないといいが……。

十月十九日、戒壇院の松林にて

きょうはまたすばらしい秋日和だ。あきびより午前中、クロオデルの「マリアへのお告げ」を読んだ。

数年まえの冬、雪に埋もれた信濃の山小屋で、孤独な気もちで読んだものを、もう一遍、こんどは秋の大和路の、何処かかかるい空の下で、読んでみたくて携えてきた本だが、やつとそれを読むのにいい日が来たわけだ。

雪の中で、いまよりかずつと若かつた僕は、この戯曲を手にしながら、そこに描かれている一つの主題——神的なものの人間性のなかへの突然の訪れといったようなものを、何か一枚の中世風な受胎告知図を愛するように、素朴に愛していることができた。いまも、この戯曲のそういう抒情的な美しさはすこしも減じていない。だが、こんどは読んでいるうちにいつのまにか、その女主人公ヴァイオレエヌの惜しげもなく自分を与える余りの純真さ、そうしているうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤かとう、——そういったものに何か胸をいっぱいにさせ出していた。

三時ごろ読了。そのまま、僕は何かじつとしていたくなつて、外に出た。博物館の

前も素どおりして、どこへ往くといふこともなしに、なるべく人けのない方へ方へと歩いていた。こういうときには鹿なんぞもまつぴらだ。

戒壇院かいだんいんをとり廻んだ松林の中に、誰もいないのを見ますと、漸やつと其処に落ちついで、僕は歩きながらいま読んできたクロオデルの戯曲のことを再び心に浮かべた。そうしてこのカトリックの詩人には、ああいう無垢むくな処女を神へのいけにえにするために、ああも彼女を孤独にし、ああも完全に人間性から超絶せしめ、それまで彼女をとりまいていた平和な田園生活から引き離すことがどうあつても必然だつたのであろうかと考えて見た。そうしてこの戯曲の根本思想をなしているカトリック的なもの、ことにその結末における神への讃美のようなものが、この静かな松林の中で、僕にはだんだん何か異様ことさまなものにおもえて来てならなかつた。

### 三月堂の金堂にて

月光菩薩像がつこうぼさつぞう。そのまえにじつと立つていると、いましがたまで木の葉のように散らばつていたさまざまの思念おもひとそつくり、その白みがかつた光の中に吸いこまれてゆくような気持ちがせられてくる。何んという慈しみの深さ。だが、この目をほそめて合掌をして

いる無心そうな菩薩の像には、どこか一抹いちまつの哀愁のようなものが漂つており、それがこんなにも素直にわれわれを此の像に親しませるのだという氣のするのは、僕だけの感じであろうか。……

一日じゅう、たえず人間性への神性のいどみのようなものに苦しませられていただけ、いま、この柔かな感じの像のまえにこうして立つていると、そういうことがますます痛切に感ぜられてくるのだ。

十月二十日夜

きょうははじめて生駒山を越えて、河内の国高安たかやすの里のあたりを歩いてみた。

山の斜面に立つた、なんとなく寒ざむとした村で、西の方にはずっと河内の野が果てしなく拡がっている。

ここから二つ三つ向うの村には名だかい古墳群などもあるそうだが、そこまでは往つて見なかつた。そうして僕はなんの取りとめもないその村のほとりを、いまは山の向う側になつて全く見えなくなつた大和の小さな村々をなつかしそうに思い浮かべながら、ほんの一時間ばかりさまよつただけで、帰つてきた。

こないだ秋篠の里からゆうがた眺めたその山の姿になにか物語めいたものを感じていたので、ふと気まぐれに、そこまで往つてその昔の物語の匂いをかいできただけのこと。

(そうだ、まだお前には書かなかつたけれど、僕はこのごろはね、伊勢物語なんぞの中にもこつそりと探しを入れているのだよ。……)

夕方、すこし草臥くたびれてホテルに帰つてきたら、廊下でばつたり小説家のA君に出逢つた。ゆうべ遅く大阪からこちらに著つき、きようは法隆寺へいつて壁画の模写などを見てきたが、あすはまた京都へ往くのだといつてはいる。連れがふたりいた。ひとりはその壁画の模写にたずさわっている奈良在住の画家で、もうひとりは京都から同道の若き哲学者である。みんなと一しょに僕も、自分の仕事はあきらめて、夜おそくまで酒場で駄弁だべつていた。

十月二十一日夕

きようはA君と若き哲学者のO君とに誘われるがままに、僕も朝から仕事を打棄うつちやつて、一しょに博物館や東大寺をみてまわつた。

午後からはO君の知つてはいる僧侶の案内で、ときおり僕が仕事のことなど考えながら歩いた、あの小さな林の奥にある戒壇院かいだんいんの中にもはじめてはいることができた。

がらんとした堂のなかは思つたより真つ暗である。案内の僧があけ放してくれた四方の扉からも僅かしか光がさしこんでこない。壇上の四隅に立ちはだかつた四天王の像は、それぞれ一すじの逆光線をうけながら、いよいよ神々しさを加えているようだ。

僕は一人きりいつまでも広目天こうもくてんの像のまえを立ち去らずに、そのまゆねをよせて何物かを凝視している貌かおを見上げていた。なにしろ、いい貌だ、温かでいて烈しい。……

「そうだ、これはきっと誰か天平時代の一流人物の貌をそつくりそのまま模してあるにちがいない。そうでなくては、こんなに人格的に出来あがるはずはない。……」そうおもいながら、こんな立派な貌に似つかわしい天平びとは誰だろうかなあと想像してみたりしていた。

そうやつて僕がいつまでもそれから目を放さずにいると、北方の多聞天たもんてんの像を先刻から見ていたA君がこちらに近づいてきて、一しょにそれを見だしたので、

「古代の彫刻で、これくらい、こう血の温かみのあるのは少いような気がするね。」と僕は低い声で言つた。

A君もA君で、何か感動したようにそれに見入つっていた。が、そのうち突然ひとりごとのように言つた。「この天邪鬼あまのじやくというのかな、こいつもこうやって千年も踏みつけられ

てきたのかとおもうと、ちょっと同情するなあ。」

僕はそう言われて、はじめてその足の下に踏みつけられて苦しそうに悶えている天邪鬼に気がつき、A君らしいヒュウマニズムに頬笑みながら、そのほうへもしばらく目を落した。……

数分後、戒壇院の重い扉が音を立てながら、僕たちの背後に鎖された。<sup>とざ</sup>再びあの真つ暗な堂のなかは四天王の像だけになり、其処には千年前の夢が急にいきいきと蘇り出していくうちに、僕は何んだか身の緊る<sup>しま</sup>ような気がした。

それから僕たちは僧侶の案内で、東大寺の裏へ抜け道をし、正倉院がその奥にあるとう、もの寂びた森のそばを過ぎて、畠などもある、人けのない裏町のほうへ歩いていった。と、突然、僕たちの行く手には、一匹の鹿が畠の中から犬に追い出されながらもの凄い速さで逃げていった。そんな小さな葛<sup>かつどう</sup>藤までが、なにか皮肉な現代史の一場面のように、僕たちの目に映つた。

十月二十三日、法隆寺に向う車窓で

きのうは朝から一しよう懸命になつて、新規に小説の構想を立ててみたが、どうしても

駄目だ。きょうは一つ、すべての局面転換のため、最後のとつておきにしていた法隆寺へ往つて、こないだホテルで一しょに話した画家のSさんに壁画の模写をしているところでも見せてもらつて、大いに自分を発奮させ、それから夢殿の門のまえにある、あの虚子の「斑鳩物語」に出てくる、古い、なつかしい宿屋に上がつて、そこで半日ほど小説を考えてくるつもりだ。

十月二十四日、夕方

きのう、あれから法隆寺へいつて、一時間ばかり壁画を模写している画家たちの仕事を見せて貰いながら過ごした。これまでにも何度かこの壁画を見にきたが、いつも金堂のなかが暗い上に、もう何処もかも痛いたしいほど剥落はくらくしているので、殆ど何も分からず、ただ「かべのゑのほとけのくにもあれにけるかも」などという歌がおのずから口ずさまれてくるばかりだつた。——それがこんど、金堂こんどうの中にはいつてみると、それぞれの足場の上で仕事をしている十人ばかりの画家たちの背ごしに、四方の壁に四仏淨土を描いた壁画の隅々までが螢光灯のあかるい光のなかに鮮やかに浮かび上がつてゐる。それが一層そのひどい剥落のあとをまざまざと見せてはいるが、そこに浮かび出てきた色調の美しいと

いつたらない。画面全体にほのかに漂つて いる透明な空色が、どの仏たちのまわりにも、なんともいえず愉快<sup>たの</sup>な雰囲気をかもし出している。そうしてその仏たちのお貌だの、宝冠だの、天衣<sup>てんね</sup>だのは、まだところどころの陰などに、目のさめるほど鮮やかな紅だの、緑だの、黄だの、紫だのを残している。西域あたりの画風らしい天衣などの緑いろの凹凸のぐあいも言いしれず美しい。東の隅の小壁に描かれた菩薩<sup>ぼさつ</sup>の、手にしている蓮華<sup>れんげ</sup>に見入つていると、それがなんだか薔薇<sup>ばら</sup>の花かなんぞのような、幻覚さえおこつて来そうになるほどだ。

僕は模写の仕事の邪魔をしないように、できるだけ小さくなつて四壁の絵を一つ一つ見てまわっていたが、とうとうしまいに僕もSさんの櫓<sup>やぐら</sup>の上にあがりこんで、いま描いている部分をちかぢかと見せて貰つた。そこなどは色もすつかり剥<sup>は</sup>げて いる上、大きな亀裂が稲妻形にできている部分で、そういうところもそつくりそのままに模写しているのだ。なにしろ、こんな狭苦しい櫓の上で、絵道具のいっぱい散らばつた中に、身じろぎもならず坐つたぎり、一日じゅう仕事をして、一寸平方位の模写しかできないそうだ。どうかすると何んにもない傷痕ばかりを描いて いるうちに一と月ぐらいはいつのまにか立つてしまうこともあるという。——そんな話を僕にしながら、その間も絶えずSさんは絵筆を動かして

いる。僕はSさんの仕事の邪魔をするのを怖れ、お札をいって、ひとりで櫓を下りてゆきながら、いまにも此の世から消えてゆこうとしている古代の痕をこうやって必死になつてその儘に残そうとしている人たちの仕事に切ないほどの感動をおぼえた。……

それから金堂を出て、新しくできた宝蔵の方へゆく途中、子規の茶屋の前で、僕はおもいがけず詩人のH君にひょっこりと出逢つた。ずっと新薬師寺に泊つていたが、あす帰京するのだそうだ。そうして僕がホテルにいるということをきいて、その朝訪ねてくれたが、もう出かけたあとだつたので、こちらに僕も来ているとは知らずに、ひとりで法隆寺へやつて來た由。——そこで子規の茶屋に立ちより、柿など食べながらしばらく話しあい、それから一しょに宝蔵を見にゆくことにした。

僕の一番好きな百濟觀音は、中央の、小ぢんまりとした明かるい一室に、ただ一体だけ安置せられている。こんどはひどく優遇されたものである。が、そんなことにも無関心そうに、この美しい像は相変らずあどけなく頬笑まれながら、静かにお立ちになつていられる。……

しかしながら、此のうら若い少女の細つそりとしたすがたをなすつていられる菩薩像は、おもえば、ずいぶん數奇なる運命をもたれたもつたものだ。——「百濟觀音」という

お名称も、いつ、誰がとなえだしたものやら。が、それの示すごとく古朝鮮などから将来せられたという伝説もそのまま素直に信じたいほど、すべてが遠くからきたものの異常さで、そのうつとりと下脹しもぶくれした頬のあたりや、胸のまえで何をそうして持っていたのだからも忘れてしまつて いるような手つきの神々しいほどのうつつなさ。もう一方の手の先きで、ちよいと軽くつまんで いるきりの水瓶すいびょうなどはいまにも取り落しはすまいかとおもわれる。

この像はそういう異国のものであるというばかりではない。この寺にこうして漸やつと落ちつくようになつたのは中古の頃で、それまでは末寺の橘たちばな寺でらあたりにあつたのが、その寺が荒廃した後、此処に移されてきたのだろうといわれている。その前はどこにあつたのか、それはだれにも分からぬらしい。ともかくも、流離りゅうりというものを彼女たちの衰しい運命としなければならなかつた、古代の氣だくとも美しい女たちのように、此の像も、その女身の美しさのゆえに、国から國へ、寺から寺へとさすらわれたかと想像すると、この像のまだうら若い少女のような魅力もその底に一種の犯し難い品を帶びてくる。……そんな想像にふけりながら、僕はいつまでも一人でその像をためつすがめつして見ていた。どうかすると、ときどき揺らいでいる瓔珞ようらくのかげのせいか、その口もとの無心そうな頬

笑みが、いま、そこに漂つたばかりかのように見えたりすることもある。そういう工合なども僕にはなかなかありがたかつた。……

それから次ぎの室で伎楽面ぎがくめんなどを見ながら待つていてくれたH君に追いついて、一しょに宝蔵を出て、夢殿のそばを通りすぎ、その南門のまえにある、大黒屋という、古い宿屋に往つて、昼食をともにした。

その宿の見はらしのいい中二階になつた部屋で、田舎らしい鳥料理など食べながら、新薬師寺での暮らしぶりなどをきいて、僕も少々うらやましくなつた。が、もうすこし人並みのからだにしてからでなくては、そういう精進三昧しょうじんざんまいはつづけられそうもない。それからH君はこちらに滞在中に、ちか頃になく詩がたくさん書けたといって、いよいよ僕をうらやましがらせた。

四時ごろ、一足さきに帰るというH君を郡山こおりやま行きのバスのところまで見送り、それから僕は漸つとひとりになつた。が、もう小説を考えるような気分にもなれず、日の暮れるまで、ぼんやりと斑鳩いかるがの里をぶらついていた。

しかし、夢殿の門のまえの、古い宿屋はなかなか哀れ深かつた。これが虚子の「斑鳩物語」に出てくる宿屋。なにしろ、それはもう三十何年かまえの話らしいが、いまだその

ときとおなじ構えのようだ。もう半分家が傾いてしまつていて、中二階の廊下など歩くのもあぶない位になつてゐる。しかしその廊下に立つと、見はらしはいまでも悪くない。大和の平野が手にとるように見える。向うのこんもりした森が三輪山みわやまあたりらしい。菜の花がいちめんに咲いて、あちこちに立つてゐる梨の木も花ざかりといつた春さきなどは、さぞ綺麗だろう。と、何んということなしに、そんな春さきの頃の、一と昔まえのいかるがの里の若い娘のことを描いた物語の書き出しのところなどが、いい氣もちになつて思い出されてくる。——しかし、いまはもうこの里も、この宿屋も、こんなにすっかり荒れてしまつてゐる。夜になつたつて、おさ箋を打つ音で旅びとの心を慰めてくれるような若い娘などひとりもいまい。だが、きいてみると、ずっと一人きりでこの宿屋に泊り込んで、毎日、壁画の模写にかよつてゐる画家がいるそうだ。それをきいて、僕もちよつと心を動かされた。一週間ばかりこの宿屋で暮らして、僕も仕事をしてみたら、もうすこしひんとした気もちで仕事ができるかも知れない。

どのみち、きょうは夢殿や中宮寺なんぞも見損つたから、またあすかあさつて、もう一遍出なおして来よう。そのときまでに決心がついたら、ホテルなんぞはもう引き払つて来てもいい。……

そんな工合で、結局、なんにも構想をまとめずに、暗くなつてからホテルに帰つてくると、僕は、夜おそらくまで机に向つて最後の努力を試みてみたが、それも空しかつた。そして一時ちかくなつてから、半分泣き顔をしながら、寝床にはいつた。が、昼間あれだけ気もちよげに歩いてくるせいか、よく眠れるので、愛想がつきる位だ。――

けさはすこし寝坊をして八時起床。しかし、お昼もきようはホテルでして、一日じゅう新らしいものに取りかかつていた。――こないだ折口博士の論文のなかでもつて綺麗だなあとおもつた葛の葉くずのはという狐の話。あれをよんでもから、もつといろんな狐の話をよみたくなつて、りょういき靈異記や今昔物語などを搜して買ってきてあつたが、けさ起きしなにその本を手にとつてみているうちに、そんな狐の話ではないが、そのなかの或る物語がふいと僕の目にとまつた。

それは一人のふしあわせな女の物語。――自分を与え与えしているうちにいつしか自分を神にしていたようなクロオデル好みの聖女とは反対に、自分を与えれば与えるほどいよいよはかない境涯に墮おちちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。――そういう物語の女を見いだすと、僕はなんだか急に身のしまるような気もちになつた。これならば幸先さいさきがよい。そういう中世のなんでもない女を描くのなら、僕も無理

に背のびをしなくともいいだろう。こんやもう一晩、この物語をとつくりと考えてみる。

ジャケット届いた。本当にいいものを送つてくれた。けさなどすこし寒かつたので、一枚ぐらいジャケットを用意してくればよかつたとおもつていたところだ。こんやから早速著<sup>き</sup>てやろう。

十月二十四日夜

ゆうがた、浅茅<sup>あさぢ</sup>が原<sup>はら</sup>のあたりだの、ついじのくずれから菜畠などの見えたりしている高<sup>たか</sup>  
畠<sup>かばたけ</sup>の裏の小径<sup>こみち</sup>だのをさまよいながら、きのうから念頭<sup>ねんとう</sup>を去らなくなつた物語の女のう  
えを考えつづけていた。こうして築土<sup>ついじ</sup>のくずれた小径を、ときどき尾花<sup>おばな</sup>などをかき分ける  
ようにして歩いていると、ふいと自分のまえに女を捜している狩衣<sup>かりぎぬ</sup>すがたの男が立ちあ  
らわれそうな気がしたり、そうかとおもうとまた、何処から女のかなしげにすすり泣く  
音がきこえて来るような気がして、おもわずぞつとしたりした。これならば好い。僕はい  
つなん時でも、このまますうつとその物語の中にはいつてゆけそうな気がする。……  
この分なら、このままホテルにいて、ときどきこいらを散歩しながら、一週間ぐらい  
で書いてしまえそうだ。

十月二十五日夜

けさちよつと博物館にいつただけで、あとは殆ど部屋とヴエランダとで暮らしながら、小説の構想をまとめた。構想だけはすっかり出来た。いま細部の工夫などを愉しんでやつてゐる。日暮れごろ、また高畑のほうへ往つて、ついじの崩れのあるあたりを歩いてきた。尾花が一めんに咲きみだれ、もう葉の黄ばみだした柿の木の間から、夕月がちらりと見えたり、三笠山の落ちついた姿が渋い色をして見えたりするのが、何んともいえずに好い。晩秋から初冬へかけての、大和路はさぞいいだろうなあと、つい小説のほうから心を外らして、そんな事を考え出しているうちに、僕は突然或る決心をした。——僕はやはり二三日うちに、荷物はこのまま預けておいて、ホテルを引き上げよう。しかし、かかるがの宿に籠るものではない。東京へ帰る。そうしておまえの傍で、心しづかにこの仕事に向い、それを書き上げてから、もう一度、十一月のなかば過ぎにこちらに来ようというのだ。そうして大和路のどこかで、秋が過ぎて、冬の来るのを見まもつていたい。都合がついたら、おまえも一しょにつれて来よう、どうもいまこうして奈良にいると、一日じゅう仕事に没頭しているのが何んだかもつたいなくなつて、つい何処かへ出かけてみたくなる。何処へ

いつても、すぐもうそこには自分の心を豊かにするものがあるのだからなあ。しかし、昼間はそうやつて歩きまわり、夜は夜で、落ちついてゆうべの仕事をつづけるなんという真似のできない僕のことだから、いつそこのまま出来かけの仕事をもつて東京へ帰つた方がいいのではないか、とまあそんな事も一とおりは考えに入れたうえの決心なのだ。

僕はホテルに帰つてくると、また気のかわらないうちにとおもつて、すぐ帳場にそのことを話し、しあさつての汽車の切符を買っておいて貰うこととした。

### 十月二十六日、斑鳩の里にて

きょうはめずらしくのんびりした氣もちで、汽車に乗り、大和平をはすに横ぎつて、佐保川に沿つたり、西の京のあたりの森だの、その中ほどにくつきりと見える薬師寺の塔だのをなつかしげに眺めたがら、法隆寺駅についた。僕は法隆寺へゆく松並木の途中から、村のほうへはいって、道に迷つたように、わざと民家の裏などを抜けたりしているうちに、夢殿の南門のところへ出た。そこでちょっと立ち止まって、まんまえの例の古い宿屋をしげしげと眺め、それから夢殿のほうへ向つた。

夢殿を中心として、いくつかの古代の建物がある。ここいらは廐戸うまやどののおうじ皇子の御住居の

あとであり、向うの金堂や塔などが立ち並んでおのずから厳肅な感じのするあたりとは打つて變つて、大いになごやかな雰囲気を漂わせていてしかるべき一廊。——だが、この二三年、いつ来てみても、何處か修理中であつて、まだ一度もこのあたりを落ちついた氣もちになつて立ちもとおつたことがない。

いまだにそのまわりの伝法堂などは板がこいがされているが、このまえ来たとき無慙にも解体されていた夢殿だけは、もうすっかり修理ができあがつていた。……

そこで僕はときどきその品のいい八角形をした屋根を見あげ見あげ、そこの小ぢんまりとした庭を往つたり来たりしながら、

ゆめどのはしづかなるかなものもひにこもりていまもましますがこと  
義疏ぎそのふでたまたまおきてゆふかげにおりたたしけむこれのふるには

そんな「鹿鳴集」の歌などを口ずさんでは、自分の心のうちに、そういつた古代びとの物静かな生活を蘇らせてみたりしていた。

僕は漸く心がしづかになつてから夢殿のなかへはいり、秘仏を拝し、そこを出ると、再

び板がこいの傍をとおつて、いかにも虔ましげに、中宮寺の観音を拝しにいった。――

それから約三十分後には、僕は何か赫かしい目つきをしながら、村を北のほうに抜け出し、平群の山のふもと、法輪寺や法起寺のある森のほうへぶらぶらと歩き出していた。

ここいら、古くはかかるがの里と呼ばれていたあたりは、その四囲の風物にしても、又、その寺や古塔にしても、推古時代の遺物がおおいせいか、一種蒼古な氣分をもつてているようにおもわれる。或いは厩戸皇子のお住まいになられていたのがこのあたりで、そうしてその中心に夢殿があり、そこにおける真摯な御思索がそのあたりのすべてのものにまで知らず識らずのうちに深い感化を与えていたようなことがあるかも知れない。そうしてこのあたりの山や森などはもつとも早く未開状態から目覚めて、そこに無数に巣くつていた小さな神々を追い出し、それらの山や森を朝夕うちながめながら暮らす里人たちは次第に心がなごやかになり、生きていることのよろこびをも深く感ずるようになりはじめていた。……

そうだ、僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に仏教が渡来してきて、その新らしい宗教に次第に追いやられながら、遠い田舎のほうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の侘わざやいうしろ姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流謫の

神々にいたく同情し、彼等をなつかしみながらも、新らしい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。なかなか好いものになりそうではないか。

行く手の森の上に次ぎ次ぎに立ちあらわれてくる法輪寺や法起寺の小さな古塔を目にしながら、そんな小説を考え考え、そこいらの田圃たんばの中を歩いていると、僕はなんともいえず心なごやかな、いわばパストラアルな気分にさえなり出していた。

十月二十七日、琵琶湖にて

けき奈良を立つて、ちょっと京都にたちより、往きあたりばつたりにはいった或る古本屋で、リルケが「ぼるとがる文ぶみ」などと共に愛していた十六世紀のリヨンびとルイズ・ラベという薄倖の女詩人のかわいらしい詩集を見つけて、飛びあがるようになつて喜んで、途中、そのなかで、

「ゆふべわが臥床ふしどに入りて、いましも甘き睡りに入らんとすれば、わが魂はわが身より君が方にとあくがれ出づ。しかるべきは、われはわが胸に君を搔きいだきゐるがごとき心ちす、ひねもす心も切に恋ひわたりゐし君を。ああ、甘き睡りよ、われを欺りてなりとも慰

めよ。うつつにては君に逢ひがたきわれに、せめて恋ひしき幻をだにひと夜与へよ。」と  
いう哀婉な一章などを拾い読みしたりしつつ、午過ぎ、やつと近江の湖にきた。  
ここで、こんどの物語の結末——あの不しあわせな女がこの湖のほとりでむかしの男と  
再会する最後の場面——を考えてから、あすは東京に帰るつもりだ。

いま、ちよつと近所の小さな村を二つ三つ歩いてみた。どこの人家の垣根にも、茶  
の花がしろじろと咲いていた。これで、昼の月でもほのかに空に浮かんでいたら満点だが。

## 古墳

J兄

この秋はずつと奈良に滞在していましたが、どうも思うように仕事がはかどらず、どう  
とうその仕事をかたづけるためにしばらく東京に舞いもどっていました。それからすぐま  
たこちらに来るつもりでいましたが、すこし無理をして仕事をしたため、そのあとがひど

く疲れて一週間ばかり寐たり何かしているうちに、つい出そびれて、やつと十二月になつてこちらに来たような始末です。この七日にはどうしても帰京しなければならない用事がある上、こんどはどうしても倉敷の美術館にいつてエル・グレコの「受胎告知」を見てきたいので、奈良には三四日しかいられないことになりました。まるでこの秋ホテルに預けておいた荷物をとりにだけきたような恰好です。

でも、そんな三四日だつて、こちらでもつて自分の好きなように過ごすことができるのだとおもうと、たいへん幸福でした。僕は一日の夜おそくホテルに着いてから、さあ、あすからどうやって過ごそうかと考え出すと、どうも往つてみたいところが沢山ありますけど困つてしましました。そこで僕はそれを二つの「方」に分けて見ました。一つの「方」には、まだ往つたことのない室生寺や聖林寺、それから淨瑠璃寺などがあります。もう一つの「方」は、飛鳥の村々や山の辺の道のあたり、それから瓶原のふるさとなどで、そんないまは何んでもなくなつているようなところをぼんやり歩いてみたいとも思いました。こんどはそのどちらか一つの「方」だけで我慢することにして、その選択はあすの朝の気分にまかることにして寝床にはりました。……

翌朝、食堂の窓から、いかにも冬らしくすつきりした青空を見ていますと、なんだかも

う此処にこうしていいるだけでいい、何処にも出かけなくつたつていいと、そんな欲のない氣もちにさえなり出した位ですから、勿論、めんどうくさい室生寺ゆきなどは断念しました。そうして十時ごろやつとホテルを出て、きょうはさしあたり山の辺の道ぐらいということにしてしまいました。三輪山の麓ふもとをすこし歩きまわつてから、柿本人麻呂の若いころ住んでいたといわれる穴師あなしの村を見に纏向山まきむくやまのほうへも往つてみたりしました。このあたり一帯の山麓さんろくには名もないような古墳が群らがつているということを聞いていたので、それでも見ようとおもつていたのだけれど、どちらに向つて歩いてみても、丘はさみという丘が蜜柑烟みかんばたけで、若い娘たちが快活そうに唄い唄い、鍊はさみの音をさせながら蜜柑を採つているのでした。何か南国的といいたいほど、明るい生活氣分にみちみちているようなのが、僕にはまったくおもいがけなく思われました。——が、そういう蜜柑山の殆どすべてが、ことによつたら古代の古墳群のあとなのかも知れません。そんな想像が僕の好奇心を少しくそそのかしました。

次ぎの日——きのうは、恭仁京くにのみやの址あとをたずねて、瓶原にいつて一日じゅうぶらぶらしていました。ここの中々もおおく南を向き、その上のほうが蜜柑烟になつてゐると見え、静かな林のなかなどを、しばらく誰にも逢わずに山のほうに歩いていると、突然、上のほ

うから蜜柑をいっぱい詰めた大きな籠を背負つた娘たちがきやつきやつといいながら下りてくるのに驚かされたりしました。ながいこと山国の寒く瘦せさらぼうたような冬にばかりなじんで来たせいか、どうしても僕には此処はもう南国に近いように思われてなりませんでした。だが、また山の林の中にひとりきりにされて、急にちかぢかと見えだした鹿背かせ山などに向つていると、やはり山べの冬らしい氣もちにもなりました。……

きょうは、朝のうちにはなんだか曇つていて、急に雪でもふり出しそうな空合いでしたが、最後の日なので、おもいきつて飛鳥ゆきを決行しました。が、畝傍山うねびやまのふもとまで来たら、急に日がさしてきて、きのうのように気もちのいい冬日和ふゆびよりになりました。三年までの五月、ちょうど桐の花の咲いていたころ、君といつしょにこのあたりを二日つづけて歩きまわった折のことを思い出しながら、大体そのときと同じ村々をこんどは一人きりで、さも自分によく知っている村がなんぞのような氣やすさで、歩きまわつて来ました。が、帰りみち、途中で日がとっぷりと昏れ、五条野ごじょうのあたりで道に迷つたりして、やつと月あかりのなかを岡寺の駅にたどりつきました……

あすは朝はやく奈良を立つて、一気に倉敷を目指して往くつもりです。よほど決心をしてからないことには、このままこちらでぶらぶらしてしまいそうです。見たいものはそ

れは一ぱいあるのですから。だが、こんどはどうあつても僕はエル・グレコの絵を見て来なければなりません。なぜ、そんなに見て来なければならないような気もちになつてしまつたのか、自分でもよく分かりません。僕のうちの何物かがそれを僕に強く命ずるのです。それにどういうものか、こんどそれを見損つたら、一生見られないでしまうような焦躁<sup>しょうそ</sup>のようなものさえ感ぜられるのです。——で、僕は朝おきぬけにホテルを立てるようにつつかり荷物をまとめ、それからやつと落ちついた氣もちになつて、君にこの手紙を書き出しているのです。こんどこちらにちよつと来ているうちにいろいろ考えたこと——と いうより、三年まえに君と同道してこの古い国をさまよい歩いたときから僕のうちに萌しだした幾つかの考えのうちでも、まあどうやらこうやら恰好のつきだしているものを、ともかくも一応君にだけでも報告しておきたいと思うのです。

その三年前のこと、僕は今までの仕事にも一段落ついたようなので、これから新らしい仕事をはじめるため、一種の気分転換に、ひとりで大和路をぶらぶらしながら、そのあ

たりのなごやかな山や森や村などを何んということなしに見てまわつて来るつもりでした。それが急に君と同伴することになり、いきおい古美術に熱心な君にひきずられて、僕までも一しよう懸命になつて古い寺や仏像などを見だし、そして僕の旅<sup>りよ</sup>囊<sup>のう</sup>はおもいがけなくも豊かにされたのでした。きょう僕がいろいろな考えのまにまに歩いてきた飛鳥の村々にしたつて、この前君と同道していなかつたら、きょうのようには好い収穫を得られなかつたのではないかと思います。もし僕ひとりきりだつたら、僕はただぼんやりと飛鳥川だの、そのあたりの山や丘や森や、そのうえに拡がつた氣もちのいい青空だのを眺めながら、愉快<sup>たの</sup>しい放浪児のように歩きまわつていただけだつたでしよう。——が、君に引つぱつてゆかれる儘<sup>まま</sup>、僕はそんなものをついぞ見ようとも思わなかつた古墳だの、廃寺のあとに残つてゐる礎石だのを、初夏の日ざしを一ぱいに浴びながら見てまわつたりしました。そのときはあんまり引つぱりまわされたので少し不平な位でした。しかし、どうもいまになつて考えて見ると、そのとき君のあとにくつついて何気なく見たりしていたもののうちには、その後何かと思ひ出されて、いろいろ僕に役立つたものも少くはないようです。あの菖蒲<sup>あやめ</sup>池古墳<sup>けこぶん</sup>のごときは、君のおかげで僕の知つた古墳ですが、あれなどはもつとも忘れがたいもののひとつであります。

そうです、そのときはまず畝傍山の松林の中を歩きまわり、久米寺くめでらに出、それから軽やかに五条野などの古びた村を過ぎ、小さな池（それが菖蒲池か）のあつた丘のうえの林の中を無理に抜けて、その南側の中腹にある古墳のほうへ出たのでしたね。——古代の遺物である、筋のいい古墳というものを見たのは僕にはそれがはじめてでした。丘の中腹に大きな石で囲つた深い横穴があり、無慙むざんにもこわされた入口（いまは金網がはつてある……）からぞいてみると、その奥の方に石棺らしいものが二つ並んで見えていました。その石棺もひどく荒らされていて、奥の方にはまだ石の蓋ふたがどうやら原形を留めたまま残っていますが、手前にある方は蓋など見るかげもなく毀こわされました。

この古墳のように、夫婦をともに葬つたのか、一つの石廓せつかくのなかに二つの石棺を並べてあるのは比較的に珍らしいこと、すつかり荒らされている現在の状態でも分かるように、これらの石棺はかなり精妙に古代の家屋を模してつくられているが、それはずつと後期になつて現われた様式であること、それからこの石棺の内部は乾漆かんしつになつていたこと、そして一めんに朱で塗られてあつたと見え、いまでもまだところどころに朱の色が鮮やかに残つているそうであること、——そういう細かいことまでよく調べて来たものだと君の説明を聞いて僕は感心しながらも、さりげなさそうな顔つきをしてその中をのぞいていまし

た。その玄室げんしつの奥ぶかくから漂つてくる一種の湿め湿めとした氣とともに、原始人らしい死の觀念がそのあたりからいまだに消え失せずにいるようで、僕はだんだん異様な身ぶるいさえ感じ出していました。——やつとその古墳のそばを離れて、その草ふかい丘をずんづん下りてゆくと、すぐもう麦畑の向うに、橘寺のほうに往くらしい白い道がまぶしいほど日に赫かがやきながら見え出しました。僕たちはそれからしばらく黙りあつて、その道を橘寺のほうへ歩いてゆきました。……

そうやつて君と一しょにはじめて見たその菖蒲池古墳、——そのときはなんだか荒んだ、古墳らしい印象を受けただけのように思つていましたが、だんだん月日が立つて何かの折にそれを思い出したりしているうちに、そのいかにもさりげなさそうに一ぺん見たきりの古墳が、どういうものか、僕の心のうちにいつも一つの場所を占めているようになつて來ました。——いわば、それは僕にとつては古代人の死に対する觀念をひとつの形象にして表わしてくれているようなところがあるのでありましょう。いつごろからそういう古代人

の死の考え方などに僕が心を潜めるようになつたかと云いますと、それは万葉集などをひらいて見ることに、そこにいくつとなく見出される挽歌の云うに云われない美しさに胸をしめつけられることの多いがためでした。このごろ漸くそういう挽歌の美しさがどういうところから来ているかが分かりかけて来たような気がします。

先ず、古代人の死に対する考え方を知るために、あの菖蒲池古墳についてかんがえて見ます。あの古墳に見られるとき古代の家屋をいかにも真似たような石棺様式、——それはそのなかに安置せらるべき死者が、死後もなおずっとそこで生前とほとんど同様の生活をいとなむものと考えた原始的な他界信仰のあらわれ、或いはその信仰の継続であります。しかし、僕たちが見たその古墳のように、その切妻形の屋根といい、浅く彫上げてある柱といい、いかにもその家屋の真似が精妙になつてきだすのと前後して、突然、そういう立派な古墳というものがこの世から姿を消してしまうことになつたのです。これはなかなか面白い現象のようです。勿論、それには他からの原因もいろいろあつたでしょう。だが、そういう現象を内面的に考えてみても考えられないことはない。つまり、そういう精妙な古墳をつくるほど頭脳の進んで来た古代人は、それと同時にまた、もはや前代の人々のもつていたような素朴な他界信仰からも完全にぬけ出してきたのです。——一方、火

葬や風葬などというものが流行つてきて、彼等のあいだには死というものに対する考え方たがぐつと変つて来ました。それがどういう段階をなして変つていつたかということが、万葉集などを見ているとよく分かるような気もちがします。……

たとえば、卷二にある人麻呂の挽歌。——自分のひそかに通つていた軽の村の愛人が急に死んだ後、或る日いたたまれないよう、その軽の村に来てひとりで懊惱する、そのおりの挽歌ですが、その長歌が「……軽の市にわが立ち聞けば、たまだすき畠傍の山に鳴く鳥の声も聞えず。たまほこの道行く人も、ひとりだに似るが行かねば、すべをなみ、妹いもが名呼びて袖そでぞ振りつる」と終わると、それがこういう二首の反歌でおさめられてあります。

秋山の黄葉もみぢを茂しげみ迷まどはせる妹いもを求めむ山路やまち知らずも  
もみぢ葉ばの散つかひりゆくなべにたまづさの使つかひを見れば逢あひし日思おもほゆ

丁度、晚秋であつたのであります。彼がそうやつて懊惱しながら、軽の村をさまよつていますと、おりから黄葉がしきりと散つております。ふと見上げてみると、山とい

山がすつかり美しく黄葉している。それらの山のなかに彼の愛人も葬られているのにちがないが、それはどこいらであろうか。そんな山の奥ぶかくに、彼女がまだ生前とすこしも変わらない姿で、なんだか道に迷ったような様子をしてさまよいつづけているような気もしてならない。だが、それが山のどこいらであるのか全然わからないのだ。……

そんなことを考えつづけていると、突然、誰か落葉を踏みながら自分のほうに足早に近づいてくるものがある。見ると、文ふみを挿はさんだ梓あずさの木を手にした文使いである。ふいと愛人の文ふみを自分に届けに来たような気がして、おもわず胸をおどらせながら立ち止まっていると、落葉の音だけをあとに残してその文使いは自分の傍を過ぎていってしまう。突然、亡き愛人と逢つた日の事などが苦しいほど胸をしめつけてくる。

そういう情景がいかにもまざまざと目の前に蘇よみがえつて来るようあります。それだけで好い。その軽の村がどういうところであるかも、その歌がおのずから彷彿ぼうふつせしめている。

その藤原京ふじわらきょうのころには、京にちかい、この軽のあたりには寺もあり、森もあり、池もあり、市いちなどもあつたようであります。その死んだ愛人などもよくその市に出て、人なかを歩いたりしたこともあつたらしい。そしてその路からは畝傍山うねびやまがまぢかに見え、そのあたりには鳥などもむらがり飛んでいたのでありましよう、——今もまだその軽の村らしい

ものが残つております。その名を留めている現在の村は、藪の多い、見るかげもなく小さな古びた部落になり果てていますが、それだけに一種のいい味があつて、そこへいま往つてみても決して裏切られるようなことはありません。

低い山がいくつも村の背後にあります。そういう低い山が急に村の近くで途切れてから、それがもう一ぺんあちこちで小丘になつたり、森になつたり、藪になつたりしているような工合の村です。そういう村の地形を考えに入れながら、もう一ぺんさつきの歌を味わつてみると、一層そのニュアンスが分かつて来るような気がします。

すこし横道にそれてしまひましたので、本題に立ちかえりましよう。僕はその人麻呂の挽歌——就中その第一の反歌のなかに見られる、死に対する観念をかんがえて見ようとしていたのでした。

秋山の黄葉もみぢあはれとうらぶれて入りにし妹は待てど来いもまさず

これは巻七の雑の挽歌のなかに出てくる作者不詳のものであります。非常に人麻呂の歌と似ていて、その影響をたぶんに受けて出来たものとおもわれますが、とにかくそれで見

ても、こういうような愛する者の死に対する思想が、たんへん当時の人々に気に入られたということが分かるのであります。——その当時はもう原始的な他界信仰から脱して人々は漸くわれわれと殆ど同じような生と死との観念をもちはじめていたのにちがいありません。だが、自分の愛しているものでも死んだような場合には、死後もなお彼女が在りし日の姿のまま、その葬られた山の奥などをしよんぼりとさすらつているような切ない感じで、その死者のことが思い出されがちであります。そういう考え方は嘗つての他界信仰の名残りのようなものをおおく止めておりますが、半ばそれを否定しながらも、半ばそれを好んで受け入れようとしている、——すくなくとも心のうえではすつかりそれを受け入れてしまつてゐるのであります。そうしてまた一方では、そういう愛人の死後の姿をできるだけ美化しようとする心のはたらきがある。……そういうきまざまな心のはたらきが、ほとんど無意識的に行われて、なんの造作もなくすうつと素直に歌になつたところに、万葉集のなかのすべての挽歌のいい味わいがあるのであらうと思われます。

軽の村の愛人の死をいたんだ歌とならんで、もう一首、人麻呂がもうひとりの愛人（こちらの愛人とは同棲どうせいをし、子まであつた）の死を悲しんだ歌があり、それにも死者に対する同様の考え方たが見られます。「……大鳥おおとりのはいも

と人のいへば、岩根さくみてなづみ來し、よけくもぞなき。現身うつそみとおもひし妹いもが、玉か  
ぎるほのかにだにも見えぬ、思へば。」——人は死んでしばらくの間は山の奥などに生き  
ているときとすこしも変らない姿をして暮らしているものだと、老人などのいうことを聞  
いて、亡くなつた妻恋いしさのあまりに、もしやとおもつて、岩を踏み分けながら、骨を  
折つて山のなかを搜してみたが、それも空しかつた。ひよつとしたら在りし日さながらの  
妻の姿をちらりとでも見られはすまいかと思つていたが、ほんの影さえも見ることができ  
なかつた。——これはその長歌の後半をなしている部分ですが、ここにも人麻呂の死に対  
する同様の観念があらわれております。——すこしそれが露骨に出すぎている位で、いか  
にも情趣のふかい前の歌ほど僕は感動をおぼえません。でも、「おおとりは大鳥の羽がひの山」な  
どというその山の云いあらわしかたには一種の同情をもちます。翼を交叉こうささせている一羽  
の大きな鳥のような姿をした山、——何処にあるのだか分からぬけれども、なんだかそ  
んな姿をした山が何処かにありそうな気がする、そんな心象を生じさせるだけでもこの山  
の名ひとつがどんなに歌全体に微妙に利いているか分かりません。いろいろな学者が「お  
おとり鳥の」を枕詞まくらことばとして切り離し、「羽買山」だけの名をもつた山をいろいろな文献  
の上から春日山の附近に求めながら、いまだにはつきり分からぬでいるようであります。

勿論、学としてはそういう努力が大切であります。これを歌として味わう上からは、そういう羽買山ではなしに、何処かにありそうな、大きな鳥の翼のような形をした山をただぼんやりと浮かべて見てるだけの方がいいような気がするのです。……

僕は数年まえ信濃の山のなかでさまざま人の死を悲しみながら、リルケの「Requiem 『レクヰエム』」をはじめて手にして、ああ詩というものは、こういうものだつたのかとしみじみと覚つた」とがありました。——そのときからまた一二三さん年立ち、或る日万葉集に読みふけつてゐるうちに一聯の挽歌に出逢い、ああ此處にも、こういうものがあつたのかとおもいながら、なんだかじつといられないような気もちがい出しました。それから僕は徐々に古代の文化に心をひそめるようになりました。それまでは信濃の国だけありさえすればいいような氣のしていた僕は、いつしかまだすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘われるようになつてきました。……

そういうようにして漸やつとはじめて大和路に來た三年前のこと、君と一しょに見た、菖

蒲池古墳のことから、つい考えのまにまに思わぬことを長ながと書いてしまいましたが、別に最初からどういうことを書こうかと考えて書き出したわけのものでもないので、これはこれとしてお読み下さい。

——でも、最初まあそんなものでも書こうとしかけていた僕のきょうの行程を続けてみますと、そうやつて軽のあたりをさまよつた後、剣の池のほうに出て、それから藁塚のあちこちに堆く積まれている薺田のなかを、香具山や耳成山かぐやまをたえず目にしながら歩いているうちに、いつか飛鳥川のまえに出てしましました。ここいらへんはまだいかにも田舎じみた小川です。が、すこしそれに沿つて歩いていきますと、すぐもう川の向うに雷の村が見えてきました。土橋があつて、ちょっといい川原になつています。僕はそこまで下りて、小さな石に腰かけながら浅いながれに日をそいでいました。なんだか鶴鴿せきれいでもぴょんぴょん跳ねていたら似合うだろうとおもうような、なんでもない景色です。それから僕は飛鳥の村のほうへ行く道をとらずに、甘檜あまがしの丘の縁を縫いながら、川ぞいに歩いてゆきました。ここいらからはしばらく飛鳥川もたいへん好い。このまえ五月に君と一しょに歩いたときからよほど僕の気に入つたものと見えます。あのときにはあそこの丘の端に桐の花が咲いていた、このへんの道ばたには一もと野茨のいばらの花も咲いていたと、そんな小

さな思い出まで浮かんでくる位なのです。……

こんなことをまた書き出していたらきりがありません。もうおもい切つてここいらで筆をおきます。——その日の夕がた、最後のバスに乗りおくれた僕はしようがなく橘寺をうしろにして一人でてくてく歩き出しました。途中で夕焼けになり、南のほうに並んでいる真弓<sup>まゆみ</sup>の丘などが非常に綺麗に見えました。それから僕はせつかくその前まで来ているのだからと思つて、菖蒲池古墳<sup>あしょち</sup>のある丘を捜してそこまで上がりつていつて見ました。が、その古墳の前まで辿りついたときにはもう日がとっぷりと昏れて、石廊<sup>せつかく</sup>のなかはほとんど何も見えない位でした。それでも僕はバスに乗りおくれたばかりにもう一度それが見られて反つて好いことをしたと思いながら、もと来た道を引っかえして再び駅のほうへ薄暮<sup>はく暮</sup>のなかを歩いてゆきました。それからまた五条野のあたりで道に迷つて、やつと駅に著いたときは月の光を背に浴びていたことは前にも書きました。

もう大ぶ夜もふけたようです。あすからの旅のことを思いながら、ちょっと部屋の窓をあけてみたら、凄いような月の光のなかに、荒池がほとんど水を涸ら<sup>か</sup>してところどころ池の底のようなものさえ無氣味に見せて います。僕はなんといふこともなしに複製で見たエル・グレコの絵を浮かべました。——こんやはどうも寝たくないような晩だけれども、

あすの朝は早いのだし、それに四時間ばかり汽車にも乗らなければならないのだから、なんとかうまくあやして自分を寝つかせましょ。

一九四一年十二月四日、奈良ホテルにて

斑  
はだれ  
雪

「冬になつて、雪がふつたら、すぐ知らせて下さい。そのときはきっと、一人ででもやつて来ますから。……」

その山の村にどうどう居残つて冬を越すことになつたK君夫妻に僕はその秋のながばその村を立ち去るとき、そう云い残していつた。

「……けさほどから急に雪がふりだしていますの。この分では大ぶ積りそうですので、主人が早くお知らせした方がいいと申しますから、これからこの手紙をもつて雪のなかを郵便局まで一走りいたします」

——万里子さんからそう云つてよこしたのは、もう十二月も末近かつた。

僕はまえから雪の信濃路を見たがつていた学生のM君を誘つたり、一しょに往く筈だつた妻の都合が悪かつたりして、すこし出かけるのに手間どり、妻だけ二三日あとから来させることにして、漸つとその小さな冬の旅に出たのは、それから四五日たつてからのことだつた。……

ゆうがた着いたその山の村には、数日まえの雪はもう殆ど消え、林の中などにところどころわずかに雪らしいものが残つてゐるきりだつた。そんな一つの林の奥に、K君たちが冬ごもりをしている山小屋がある。

「まあ、よくいらつしやいました」その小屋の中から飛びだしてきて僕たちを出むかえた万里子さんは、一とおり挨拶がすむと、さも困つたように大きい目をしてまじまじと僕の方を見ながら言つた。「——でも、もうすっかり雪がなくなつてしまつていて。なんだか

……

「いやあ、雪なんぞはどうでもいいですよ。」

僕はあわてて手をふりながら、それを遮つた。

「こないだの雪は午前中ふつたきりでした。大ぶ積つたことは積りましたけれど、午後

から日があたつて見る見るとけていつてしまうので、あんな手紙なんか出してしまって、気が気でありませんでしたわ。——でも、まだそこいらには少しばかり残っていますの。

もう薄暗くなり出している林の奥のほうにまだいくらか残雪が何かの文様<sup>もよよう</sup>のように入れるのを、万里子さんはすこし気まり悪そうにして示した。

僕はもうそんなものはどうでもよかつたが、すっかり葉が落ちて林の中がどこまでも透いてみえたりするのを珍らしそうに見ているM君におつきあいして、その儘<sup>まま</sup>しばらく三人でそこに立つて見ていた。そのうち小屋のかげからボブが飛び出してきた。

「ボブ、駄目よ。……」万里子さんはその人なつこい犬が泥足でもつて僕のほうに飛びかかるうとするのを、すばやく捕まえた。

「よう。」K君が小屋の中から首だけ出して僕たちに声をかけた。「何をしているんだい。寒いだろう。」

「こないだの雪をお見せしていますの。」万里子さんはボブがもがくのを漸<sup>や</sup>つとおさえつけながら言つた。

「雪なんぞはもうありあしないだろう。」寒がりのK君はうちの中でも頸<sup>くび</sup>巻<sup>まき</sup>をしたまま

で、小屋から出て来ようともせずに僕たちを促した。「早くはいりたまえ。」

「さつきこここの林のいりぐちで、クルツといつたかな、あの、変な女を見かけたが、なんだか夏とは見ちがえるような、凄い毛皮の外套を着て、真紅なベレかなんぞかぶつて、気どつた風に歩いていたが、こんな冬の村に一人きりで何をしているんだろう?」僕は暖炉だんろで体が温まるとき、突然その不思議な女のことを思いながら言つた。

「では、きょうまた見にきたのでしょうか。これで三度目ですわ、」万里子さんは急に目を大きくして、頸巻をしたまま暖炉の火を搔きまわしていたK君のほうを見た。

「なんだかよく来るね。」K君はやつと手を休めながらその話に加わつた。「このすこし向うに、十一月べっしきごろまでいた独逸人ドイツじんの一家がいてね、それがクリスマス頃になつたらまた来るからと云つて、一時引き上げていつたのさ。——その人達がまだ来ていないかどうかと、そうやつてもう二週間ぐらいも前から、毎日のようにその女が様子を見にくるのだがよ。二三度、僕たちのところにも立ち寄つて、何か心配そうに様子をきくので、こつちでもその度に相手になつてやつていたが、問い合わせの手紙でも出したらどうかと云うと、ただ首をふっているきりなのだ。もうその家では来ないことが分かつているのだ。それだ

のにこの頃は一日のうちに二度も三度もやつて来るんだ。いつもあの毛皮の外套をきて、紅いベレをかぶつて。——そうしてその度に、僕たちの家の中をじいつと見てゆくんだ。それをまた万里子が薄気味わるがつてね。……」

「結局、一人でさびしくつてしようがないんだな。こつちにいる他の外人とは全然つきあわないのかい。」

「どうもその女だけ除けものにされているらしい。村の人にくくとあの女はしようがありませんと云つて、てんで相手にならないんだ。」

「そんなのかい。——僕はどういう素性の女かよく知らないが、夏なんぞその女が奇妙ななりをして、買物袋をぶらさげながらなんだかしょぼしょぼして歩いているのを見かけては、何者だろうとおもつていたんだがね。あれで、この夏聞いたことだが、恋人がいるんだそうだ。毎夏やってくるハンガリイの音楽家でね、その男と町などで逢うと、人中だろうと何だろうと構わずに立ち止まつて、黙つてその音楽家の顔を穴のあくほどじつと見つめているのだそうだよ。それがもうかれこれ十年來の意中の人なのだそうだ。」

「あの女にもそんな話がね。」K君はうなずいていた。

「どうもこんなところに来ている外人には突拍子もない奴がいるものだな。——夏あ

とっぴようし

んなに見すばらしいなりをしていた女が、冬になつて誰れもいなくなると、急にすばらしい毛皮の外套なんぞを着込んで林の中をあるいていようなんて、想像もできることだよ。だが、ああして一人つきりでもつて、よく暮らしていられるものだなあ」

「本当によく暮らしているね。……」K君も考え深そうに答えた。

「だが、人のことよりか、君も寒がりのくせに、こんなところでよく我慢しているね。——どうして暮らしているだろうと、ときどき噂をしていたよ。」

「暮らそうとおもえば、どんなことをしても暮らせることが分かつたよ。それに寒さだつて、こういうものだと思つてしまえば、いくらでも我慢していられるね」

「でも、万里子さん。」と僕は言葉を挿んだ。「あなたの方の為事は大へんでしょう？」

「そんなでもありませんわ、いまのところ何んにも困りませんの。」万里子さんはそんな事はいかにも何んでもなさそうな答えかたをした。

「そりあ困らないわけさ、一週間も同じものばかり食べさせられていても、僕はなんにも言わないんだもの。」K君はそうは言つても、すこしも不平そうではなかつた。むしろ、そういう山のなかの簡素な暮らしを好んでいるようにさえ見えた。

夕食は、しかし山のなかでは思いがけない御馳走だつた。ひさしぶりに四人で鳥鍋をか

こみながら身も心も温かになつて、世はさまざまな話をするのは、<sup>たの</sup>愉しかつた。

僕はこの秋から冬にかけてひとりで旅して歩いた大和路のことを話した。それからその旅のおわりに、エル・グレコの絵を見てきたことなども話した。——その倉敷という小さな町まで五時間もかかつて往つて、やつとそこの美術館にたどりつき、画廊にはいるなり、すぐエル・グレコの絵に近づいて見ると、それは思つたより小さなものだつたが、いかにも凄い絵で、一ぺんではねつけられ、しかたなく他のゴッホやロオトレックなどを一とおり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんどはやつと少し平静な気分でその絵に向えたことなど話しながら、エル・グレコなんぞの絵の自分たちにとつて、なまやさしいものでないことをしみじみと告白した。

「それもごく小さな『受胎告知図』なんだがね。そこでは、この抒情的な画題に対している僕たちの観念がものの見事に粉碎せられてしまつてゐるのだ。天使は天使で、闇のなかから突然ぎらぎらと光を発する異常なものとして描かれているし、その天使のほうを驚いて見あげてゐる処女の顔も何かただならぬよう見える。すべてがいかにも悲劇的な感じなのだ。……こんどはこの一枚だけでもよく見てゆこうとおもつて、ずいぶん一所懸命になつて見てきたつもりだが、どうしてもまだその絵が分かつたようで分からない。

そう、分らないというより、なんだかこんな絵がこんなところに来ているのが不思議な気がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にいないような……それほど何か異様なのだ……」

「そのグレコの絵は僕も見たいね。」K君は何かじつと**炬火**<sup>だんろ</sup>の上の空間を見入っているらしかった。

「こうやつて火を焚いていると夜でもちつとも淋しくないでしよう。」僕はふいと万里子さんのほうを向いて言葉をかけた。いつのまに台所からはいつて来たのか、万里子さんの足もとにはボブが温かそうにうずくまりながら、僕たちの団欒<sup>だんらん</sup>のなかに加わっていた。

「——僕ははじめてここで冬を越すことになつたとき、夕方になるといつも淋しくつて淋しくつてどうしようかとおもうのだけれど、すつかり夜になつて火をどんどん焚きはじめると、もうちつとも淋しくなくなつたものでしたよ。」

「本当に。」万里子さんは大きい目でしげしげと僕のほうを見かえしながら、深くうなづいた。

それからまた炬火を前にして、ひとしきりさまざまな話がはずんだ。……

その夜十時過ぎ、僕たちは宿に引き上げることにした。K君たちもそこまでちょっと送

ろうといつて頸<sup>くび</sup>巻<sup>まき</sup>をしたり、外套<sup>がいとう</sup>をきたりしだしていた。もういいからとことわつても、一しょに小屋を出た。ボブもあとからくつついてきた。夜の空気は稀薄で、痛いよう冷え切つていた。僕たちはあすは何処かもつと山の方——菅<sup>すが</sup>平<sup>だいら</sup>か、野辺山あたりまで出かけ、妻がこちらに来る頃にまた戻つてくることを約束して林のはずれで別れた。

僕たちはそれから沈黙がちに、枯木の下を抜け抜け、僕たちの靴に踏まれて凍つた土の割れる音を耳にしながら、歩いていった。するともう一つ、ときどき何処かから、それとはちがつた、硬い、金属的な幽<sup>かす</sup>かな音が聞えて来た。

「あれは何んの音でしょう?」M君がいぶかしそうに訊<sup>き</sup>いた。

「ああ、あれかい。あれは、君、枯枝と枯枝とが風でぶつかる音だよ。——ほら、ああやつてちよつとぶつかるだけでも、ずいぶん鋭い音を立てるだろう。空気がぱりぱりになつているのだね。……」

そう言いながら、一しょに頭上の梢をみあげていると、絶えずかすかに揺れている枯枝の網を透いて、一めんの星空だつた。そうしてその星のひとつひとつが東京なんぞの空で見えるよりかずつと大きく見えた。

突然、右手の空家の庭の一隅で、がさがさと溜<sup>たま</sup>つた落葉がひつかきまわされるような音

がきこえた。何か白いものがそこいらをひとりで駆けずりまわっていた。

「ボブ！」僕はそのほうへ声をかけて見た。  
すると、まるでその木魂のよう<sup>こだま</sup>に、向うの林の奥から「ボブ！」と呼ぶ声がかすかにした。

「いまのは万里子さんらしいね。静かだなあ。なんだか、こう、ひさしぶりで昔の冬に出逢つたような気もちがしてならないよ。……」

「またこちらで冬をお越しになりませんか？」M君はさもそれが何んでもないことのように言つた。

「そういうこともときどきは考へてゐる。……」僕はただそう言つたぎりだつた。

僕たちはまた凍つた土を踏み割りながら、徐<sup>しづ</sup>かに歩き出した。

翌日。僕たちは朝はやく小諸まで往き、そこから八つが岳の裾野を斜に横切るガソリン・カアに乗り込んだ。もう冬休みになつていても、この山麓地方<sup>さんろくちほう</sup>はあまりスバルティフ

ではないので、乗客は僕たちのほかはみんな土地の人たちらしかつた。

南佐久みなみさくの村々の間をはじめの一時間ばかりは何事もなく千曲川に沿つてゆくだけだが、そのうち川辺の風景が少しづつ変つてきて、白楊はこやなぎや樺かばの木など多くなり、石を置いた板屋根の民家などが目立ちだした。そしてそれらの枯木だの、家だのの向うに、すっかり晴れ切つた冬空のなかに、真白な八つが岳の姿がくつきりと見えるようになつて來た。

そうやつてまだ人家のおおい平原を横切りながら、ぐんぐんと雪のある山に近づいてゆく一種の云い知れない快感を満喫しながら、僕は時々、物陰などにまだ残つている雪の工合などへも目を配つていた。

「この分では、野辺山までいっても雪は大したことはなさそうだぜ。」

僕はそんなことを口ごもつたりした。

「そうですかしら。」M君はもう見当がつかないような様子をして、ただ窓の向うに白く赫かがやいている八つが岳のほうを見つづけていた。

そのうち、だんだん谷間のようなところにはいり出す。しばらくはもう山々ともお別れだ。そうして急に谷川らしくなりだした千曲川の流れのまん中に、いくつとなく大きな石がころがつてゐるのばかり目に立つてくる。そんな谷の奥の、海うんくちの口くちという最後の村を過

ぎてからも、ガソリン・カアはなおも千曲川にどこまでも沿つてゆくように走りつづけていたが、急に大きなカアブを描いて曲がりながら、ならばやし 檬林かなんぞのなかを抜けると、突然ばあつと明かるい、広々とした高原に出た。そうしてまだ雪もかなり沢山残つているその草原の向うの一帯の森のうえに、真白な八つが岳——そのうちでも立派な赤岳と横岳とが並んで聳そびえ立つっていた。

「高原というのは、こうやつてそこへ出た時の最初の瞬間がなんとも云えず印象的でいいな。」僕はそういう目付をしてM君の方を見た。

やがて、野辺山駅に着いた。白い、小さな、瀟洒とした建物で——いや、もうそんなことはどうでもいいことにしよう。——それよりか、僕はその小さな駅に下りかけて、横書きの「野辺山」という三文字が目に飛びこんできた途端に、なにかおもわずはつとした。いままではさほどにも思つていなかつた「野辺山」という土地の名がいかにも美しい。まあ何んという素朴な呼びかたで、いい味があるのだろう。そうして此処まで来て、その三文字をなにげなく口にするとき、はじめてそのいい味の分かるような、それほどこの土地の一部になりきつてしまつてゐる純粹な名なんだなどおもつた。……

その高原の駅に下りたのは僕たちのほかには、二人づれの猟師が一組あるきり。——そ

の獵師たちは駅員と一しょになつて檻おりに入れられてきた獵犬をとり出しにかかつっていた。

そこで僕たちは二人きりで駅のそとに出たが、其処はいちめんの泥濘だつた。駅の附近には、一棟の舎宅らしいもののほか、二軒ばかり休み茶屋みたいなものがあつたが、どちらも戸を閉ざしていた、——そんなところで一休みして、簡単に腹でもこしらえながら、それからどこをどう歩くか考えてみるつもりだつた。そこへいつてみれば、大体どうすればいいかがひとりでに分かつてくるだろう位に、僕はいつもの流儀で高を括つていた。

だが、すぐ目のさきに赤岳だの横岳だのがけざやかに見えていながら、この泥濘の道ではどうしようもない。せつかくの野辺山が原もいい氣もちになつて歩きまわるわけにゆきそうもない。それに、もう午近い。ひるなんとか腹をこしらえないことには。……

「あそこに何か為事をしている人たちが見えるな。の人たちに訊いたら、すこしはこのへんの様子が分かるかもしね。」

僕はM君にそう言い、ひどい泥濘の中にはいり込まないように、道のへりのほうを歩きながら、旧街道らしいものの傍らで、二人の法被はっぴすがたの男がせつせと為事をしている方へ近づいていった。

が、だんだんそつちへ近づいて見ると、その男たちが何か荒ら荒らしい手つきで

皮を剥いているのは兎であるのが分かつてきた。そうしてまだ生ま生ましいような皮がいくつももう板に拡げて張りつけられてあるのが見え、皮を剥はがされた肉の塊りが道ばたまでころがり出していた。

「こいつはかなわないや。一番の苦が手だ。もう一ペん駅までひつかえして、訊きいてみよう。」

僕はさつさとそつちへ背を向けて、もう泥濘の中だろうとなんだろうと構わずに、その街道を突つ切りだした。そのときひよいと目を上げると、ちょうど鼻のさきに小さな道標が立っている。それでみると右が板橋、左が三軒屋。両方とも約二杆位。キロ——そうそう、板橋という部落はなんだか聞いたことがある。たしか、そこにはわびしい旅籠屋なんぞもあつたはずだ。二杆ぐらいなら、思い切つて往つてみようかと、M君と相談していると、——その板橋のほうへ通じて、片方は林で、もう一方は草原になつた、真直な街道を、何処からどう抜け出したのか、さつきちらりと駅で見かけた獵師が二人、大きな獵犬を先立てながら、さつさと歩いてゆくのが見える。

「往こう。」と僕は言つた。

「ええ。」M君もそれにすぐ応じた。

僕たちはその猟師たちのあとを追うようにしてその街道を歩き出した。どこもかもひどい泥濘だが、道のへりなどにはまだすこし雪が残っている。そんな雪のうえを抜んで歩き歩き、ときどき片側の枯木林を透かしながら赤岳だの横岳だのをちかぢかと目に入れたり、もう一方の、まだかなり雪が残つていそうな、果てしなく広い草原のはるかかなたを、甲<sup>こう</sup>武信の国境の薄白い山々が劃<sup>くぎ</sup>つていての眺めたりしていると、なかなか好いことは好い。日光もほどよく温かで、こうして歩いているとすこし汗ばんでくる位。——だが、もののに十分とたたないうちに、僕たちの前方を歩いていた猟師たちは、急に林の中へでもはいつてしまつたのか、もう影も形も見えない。そのかわりに、いつのまにか、僕たちの背後には重そうな鞆<sup>かばん</sup>を背負つた郵便配達夫がひとり姿をあらわし、黙々として泥濘のなかを歩きつづけながら、傍目もふらずに僕たちを追い越そうとしているのだつた。——僕たちも何かそれにつりこまれたように、ふたりとも急に黙り合つて、ぼんやりと立ち止まつたまま、その郵便配達夫の通り過ぎるのを見送つていた。

僕たちはどうどう二人きりになつてしまふと、別にいそぐ旅でもないので、雪のまだかなりありそうな草原のほうへちょいとはいつて見つて見た。雪は、しかし、其処にもそつたんと残つてはいない。ただ遠くから見た目に何んとなくそう見えるだけのものらしい。

が、そんな少しばかり雪の残った草原のまんなかに立つて見ると、あちこちに一本ずつ離れ離れに立つてある樺の木なんぞが、その変に枝をねじらせている工合までも、何かなつかしく思われてくる。

「こういう高原の木は、どこか孤独の相のようなものを帶びているね。」僕はふとM君にそう言つてみたが、それだけではまだなんだか言い足りないような気がした。

それから僕たちはその儘、その草原の雪のうえを歩いてみていたが、なかなか道がはかどらない。そこで、またさつきの街道のほうへ出ることにした。

みると、こんどはその街道をやはり板橋のほうへ向かつて、一匹の牝山羊をつれた女が、こう、すこし首をうなだれるようにして歩いてゆく。まだ若い女らしい。

冬の真昼、ときどきまぶしく光つている雪原、風のために枝のねじれた樹木、それらのすべてを取り囲んでいる雪の山々、——そういう自然の中からひとりでに生れてきたようなその羊飼いの女。……

「まるでセガンティニの女みたいだね。」僕はおもわず小さく叫んだ。「あの首のうなだれ方までそつくりだな。」

「セガンティニは僕はあるの倉敷の美術館にあるのしか知らないな。」

M君は僕の言葉をそのまま受けいれるにはすこし自信がなさそうだ。

「そりあ知らないといえ、僕だつてなんにも知らないようなものだがね、ただまあひよいとそんな聯想がうかんだんだ。」僕の方でもそんな云いわけをした。「そりいえば、あそこにもアルプスの絵かなあつたね。あれはどんな絵だつたかな？」

「たしか真昼の牧場の絵で、アルプスが遠く見え、前のほうに羊飼いの女の立つているような構図だつたとおもいますが。……」

「ああ、それで思い出した。なんだかこう妙にねじくれた白樺の木にその女がもたれているんだろう。……」僕はそこの美術館ではエル・グレコの絵しか見て来なかつたような気がして、いたが、セガンティニのような特異な絵はやはり注意して見ていたものと見える。さつき草原に立つた木をなつかしそうに見ながら、何かいまにも思い出せそうでまだ思い出せずにいるものが、その殆ど忘れかけていたセガンティニの絵に描かれた白樺の木とも何か関係のありそうなことをふいと感じた。だが、それはまだ僕のうちでもはつきりとしていない。……

僕たちはその牝山羊をつれた若い女に追いつこうとして、いそいで泥濘の街道に出て、再び道ばたの雪を拾いながら歩きはじめた。が、そんなことをして漸<sup>よ</sup>うやつと歩いている

僕たちは、泥濘のなかをも平氣で歩いてゆくその牝山羊をつれた女にもずんずん引き離されてしまった。そうしていつのまにか、また僕たち二人きりにされてしまった。

そんな調子でいくら歩いていつても、野辺山が原は尽きそうもない。もうかれこれ一時間ぐらいは歩いているだろう。腹もへつてきてるし、もうおしゃべりをする元気もなく、二人とも泥だらけになつた靴をただ重そうに運んでいるきりになつた。——そうして僕はもう口には出さずに、昔小さな本で読んだことのあるセガンティニの美しい生涯などを考えつづけていた。セガンティニには、アルプスの高原の自然のなかに——いわば人間の住める自然のぎりぎりの限界のようなどころに人間を置いて描いているような絵が多いが、その絵がどれもこれも妙に人なつこい。人間の世界から離れれば離れるほど、そしてそこに描かれてあるアルプスの風景がいよいよきびしければきびしいほどセガンティニの絵のもつてている人なつことはいよいよ切実になつてくる。——そこにセGANティニの絵の写真を見ただけでも、僕たちが何か心を動かされるものがありはすまいか。……そうだ、僕がさつき草原に立つた木をしみじみと見てゐるうちに、ふいと何か思い出せそうで思い出せずにいたもの、そのために知らず知らず心を一ぱいにさせていたもの、それはそんな木の或る恰かつこうばかりではなしに、こういう高原のなかに生を得てゐるすべての小さな生きも

ののもつてゐる深い味なのだ。それらのものは、ちよつと見ると、何か近づきがたいような孤独の相を帶びてみえるけれど、それらのものほど人なつこいものはないのだ。それほど切実に、存在の本質にあくがれているものはないのだ。……

そんなことを考えつづけながら、僕はもう自分の泥だらけになつた靴の重たさもさほど苦にしなくなつていた。

「あそこの大藪<sup>やぶ</sup>の中に馬が二三匹草を食べていますね。もう村が近づいてきたのではないでしようか。」

M君は自分の大きな身体をすこし持ち扱かい出しているように見える。

「畠もあるじやないか。」僕はおもわず声をはずませた。「もう村に着いたようなものだ

。」

いつか僕たちの歩いている街道は草原から離れて、両側が雜木林だの畠だのに變つてきた。そうしてすこし坂道になり出した。そういう地形の変化は、もうさすがの曠野も果てようとしていることを思わせた。それに元気づき、だんだん急になるその坂道をあがつてゆくと、その突きあたりに一軒の藁屋根<sup>わらやね</sup>の家が見え出し、そうしてその家の前の、ちょうど山かげになつた道のほとりで、一人の瘦<sup>や</sup>せた老人がそこだけまだ一面に残つてゐる雪を

シャベルかなんかで搔きよせていた。

そこまで坂をあがり切つて、その手にしたシャベルに凭りかかつて一息ついている老人に軽く会釈しながら、ふとそのそばを通り過ぎようとした途端、すぐ目のまえに、川を挟んだ小さな部落が見え、そうしてその中ほどには、古びた木橋が一つ、いかにも人なつこそうに、そうして「板橋」という名前をもつた村の目じるしのように懸かっていた。そうしていつか私達の眼界から遠ざかっていた八つが岳が、又、ちょうどその橋の真上に、白じろと赫かがいていた。

## 辛夷の花

「春の奈良へいって、馬酔木あしひの花ざかりを見ようとおもつて、途中、木曾路をまわつてきたら、おもいがけず吹雪に遭いました。……」

僕は木曾の宿屋で貰つた絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪の

ふつてゐる木曾の谷々へたえず目をやつていた。

春のなかばだというのに、これはまたひどい荒れようだ。その寒いつたらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しょに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼつたい冬外套ふゆがいとうをきた男の客がいるつきり。——でも、上松あげまつを過ぎる頃から、急に雪のいきおいが衰えだし、どうかするとぱあつと薄日のようなものが車内にもさしこんでくるようになつた。どうせ、こんなばかり寒さは此処いらだけと我慢していたが、みんな、その日ざしを慕うように、向うがわの座席に変わつた。妻もどうとう読みさしの本だけもつてそちら側に移つていつた。僕だけ、まだときどき思い出したように雪が紛々と散つてゐる木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎわに強情にがんばつてゐた。……

どうも、こんどの旅は最初から天候の具合が奇妙だ。悪いといつてしまえばそれまでだが、いいとおもえば本当に具合よくいつてゐる。第一、きのう東京を立つてきたときからして、かなり強い吹きぶりだつた。だが、朝のうちにこれほど強く降つてしまえば、ゆうがた木曾に着くまでにはとおもつてゐると、午すこしまえから急に小ぶりになつて、まだ雪のある甲斐かいの山々がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいえずすがすがしか

つた。そうして信濃境にさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすっかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせいか、何かいきいきと蘇よみがえったような色さえ帶びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまつしろな山々がくつきりと見え出してきた。……

その晩、その木曾福島の宿に泊つて、明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だつた。

「なんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、氣の毒そうにいうのだった。「このごろ、どうも癖になつてしまつて困ります。」

だが、雪はいつこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝ついて、僕たちは宿を立つてきたのである。……

いま、僕たちの乗つた汽車の走つている、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがつてゐるが、それとも、うつとうしいような雨空か、僕はときどきそれが氣になりでもするよう、窓に顔をくつつけるようにしながら、谷の上方を見あげてみたが、山々にさえぎられた狭い空じゆう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞い狂つてゐる無数の雪のほかにはなんにも見えない。そんな雪の狂舞のなかを、さつきから

ときおり出しぬけにはあつと薄日がさして来だしているのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの具合だが、ことによるところの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうなあんばいにも見える。……

僕のすぐ隣りの席にいるのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいうと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌あいづちを打つてゐる。べつに僕たちに気がねをしてそんな話しかをしてゐるような様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな恰好かつこうをしながら寝そべつていた冬外套の男が、ときどきおもい出したよう起き上つては、床のうえでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだつた。それがはじまるど、その隣りの席で向うむきになつて自分の外套で脚をつつみながら本をよんでいた妻が僕のほうをふり向いては、ちょっと顔をしかめて見せた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はいかわらず一人だけ、木曾川に沿つた窓ぎわを離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出してきたのを、なんだか残り惜しそうに見やつていた。もう木曾路ともお別れだ。氣まぐれな雪よ、旅びとの去つたあとも、もうすこし木曾の山々にふつておれ。も

うすこしの間でいい、旅びとがおまえの雪のふつてている姿をどこか平原の一角から振りかえつてしまじみと見入ることができるまで。――

そんな考えに自分がうつけたようになつてゐるときだつた、ひよいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿さんだ。

「いま、向うの山に白い花がさいていたぞ。なんの花けえ？」  
「あれは辛夷の花だ。<sup>こぶし</sup>」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかえつて、身体をのり出すようにしながら、そちらがわの山の端にその辛夷の白い花らしいものを見つけようとした。いまその夫婦たちの見た、それとおなじものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見られはすまいかとおもつたのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風にきよときよととそこいらを見まわし出したので、隣りの夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなつて、それをしおに、ちようど僕とは筋向いになつた座席であいかわらず熱心に本を読みつづけていわる妻のほうへ立つてゆきながら、「せつかく旅に出てきたのに本ばかり読んでいる奴もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向いあいに腰かけて、

そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した。

「だつて、わたしなぞは、旅先きででもなければ本もゆつくり読めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。

「ふん、そうかな」ほんとうを云うと、僕はそんなことには何も苦情をいうつもりはなかつた。ただほんのちよつとだけでもいい、そういう妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分と一しょになつて、そこいらの山の端にまつしろな花を簇むらがらせている辛夷の木を一本見つけて、旅のあわれを味つてみたかつたのである。

そこで、僕はそういう妻の返事には一向とりあわずに、ただ、すこし声を低くして言つた。

「むこうの山に辛夷の花がさいているとき。ちよつと見たいものだね。」

「あら、あれを『らんにならなかつたの。』妻はいかにもうれしくつてしまふがよいように僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いていたのに。……」

「嘘をいえ。」こんどは僕がいかにも不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでいたつて、いま、どんな景色で、どんな花がさいて

いるかぐらいはちゃんと知つていてよ。……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずつと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさえぎつて山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処には、そう言われてみて、やつと何か白っぽいものを、ちらりと認めたような気がしただけだった。

「いまのが辛夷の花かなあ？」僕はうつけたように答えた。

「しようのない方ねえ。」妻はなんだかすっかり得意そうだつた。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木々はなかなか見あたらなかつた。僕たちがそうやつて窓に顔を一しょにくつづけて眺めていると、<sup>ま</sup>目なかいの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとばつちりのようなものがちらちらと舞つているのが見えていた。

僕はもう観念して、しばらくじつと目をあわせていた。とうとうこの目で見られなかつた、雪国の春にまつさきに咲くというその辛夷の花が、いま、ど、ぞの山の端にくつきり

と立っている姿を、ただ、心のうちに浮べてみていた。そのまつしろい花からは、いましがたの雪が解けながら、その花の雪のよう<sup>しずく</sup>にぽたぽたと落ちているにちがいなかつた。

## 淨瑠璃寺の春

この春、僕はまえから一種の憧れをもつていた馬酔木<sup>あしひ</sup>の花を大和路のいたるところで見ることができた。

そのなかでも一番印象ぶかかったのは、奈良へ著いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていた蒲公英<sup>たんぽぽ</sup>や薺<sup>なづな</sup>のような花にもひとりでに目がとまって、なんとなく懐かしいような旅びとらしい気分で、二時間あまりも歩きつづけたのち、漸<sup>や</sup>つとたどりついた淨瑠璃寺の小さな門のかたわらに、丁度いまをさかりと咲いていた一本の馬酔木をふと見いだしたときだつた。

最初、僕たちはその何んの構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに危く其処を通

りこしそうになつた。その途端、その門の奥のほうの、一本の花ざかりの緋桃の木のうえに、突然なんだかはつとするようなもの、——ふいとそのあたりを翔け去つたこの世ならぬ美しい色をした鳥の翼のようなものが、自分の目にはいつて、おやと思って、そこに足を止めた。それが淨瑠璃寺の塔の鏽ついた九輪さびくりんだつたのである。

なにもかもが思いがけなかつた。——さつき、坂の下の一軒家のほとりで水菜を洗つていた一人の娘にたずねてみると、「九体寺くたいじやつたら、あこの坂を上りなはつて、二丁ほどだす」と、そこの家で寺をたずねる旅びとも少くはないと見えて、いかにもはきはきと教えてくれたので、僕たちはそのかなり長い急な坂を息をはずませながら上り切つて、さあもうすこしと思つて、僕たちの目のまえに急に立ちあらわれた一かたまりの部落とその菜畑を何気なく見過ごしながら、心もち先きをいそいでいた。あちこちに桃や桜の花がさき、めんに菜の花が満開で、あまつさえ向うの藁屋根わらやねの下からは七面鳥の啼きなこえさえのんびりと聞えていて、——まさかこんな田園風景のまつただ中に、その有名な古寺が——はあるばると僕たちがその名にふさわしい物古りた姿を慕いながら山道を骨折つてやつてきた当の寺があるとは思えなかつたのである。……

「なんだ、ここが淨瑠璃寺らしいぞ。」僕は突然足をとめて、声をはずませながら言つ

た。「ほら、あそこに塔が見える。」

「まあ本当に……」妻もすこし意外なような顔つきをしていた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね。」

「うん。」僕はそう返事ともつかずに言つたまま、桃やら桜やらまた松の木の間などを、その突きあたりに見える小さな門のほうに向つて往つた。何処かでまた七面鳥が啼いていた。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、はいりかけながら、「ああ、こんなところに馬酔木が咲いている。」と僕はその門のかたわらに、丁度その門と殆ど同じくらいの高さに伸びた一本の灌木かんぼくがいちめんに細かな白い花をふさふさと垂らしているのを認める。自分のあとからくる妻のほうを向いて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」妻もその灌木のそばに寄つてきながら、その細かな白い花を仔細に見ていたが、しまいには、なんということもなしに、そのふつさりと垂れた一と塊りを掌のうえに載せたりしてみていた。

どこか犯しがたい氣品がある、それでいて、どうにでもしてそれを手折つて、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。云わば、この花のそんなところが、花

というものが今よりかずつと意味ぶかかつた万葉びとたちに、ただ綺麗なだけならもつと他にあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ。——そんなことを自分の傍でもつてさつきからいかにも無心そうに妻のしだしている手まさぐりから僕はふいと、思い出していた。

「何をいつまでもそうしているのだ。」僕はどうとうそう言いながら、妻を促した。

僕は再び言つた。「おい、こつちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古そうな池ね。」妻はすぐついて來た。「あれはみんな睡蓮ですか？」

「そぞららしいな。」そう僕はいい加減な返事をしながら、その池の向うに見えている阿弥陀堂を熱心に眺めだしていた。

阿弥陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六七の、ジヤケツト姿の少女だつた。

うすぐらい堂のなかにずらりと並んでいる金色の九体仏こんじきを一わたり見てしまうと、

こんどは一つ一つ丹念にそれを見はじめている僕をそこに残して、妻はその寺の娘とともに堂のそとに出で、陽あたりのいい縁さきで、裏庭の方かなんぞ眺めながら、こんな会話をしあつている。

「ずいぶん大きな柿の木ね。」妻の声がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意そうだ。  
「何本あるのかしら？」一本、二本、三本……」

「みんなで七本だす。七本だすが、沢山に成りまつせ。九体寺の柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やはります。あてが一人で<sup>も</sup>いで上げるのだすがなあ、そのときのせわしい事やつたらおまへんなあ。」

「そうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

「ほんまに、秋にまたお出でなはれ。この頃は一番あきまへん。なあも無うて……」

「でも、いろんな花がさいていて。綺麗ね……」

「そうだす。いまほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲の咲くころもよろしいおまつせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかせまつせ。……」そう言いながら、急に少女は何かを思い出したようにひとりごちた。「あ

あ、そやそや、葱<sup>ねぎ</sup>とりに往かにやならんかった。」

「そうだつたの、それは悪かつたわね。はやく往つてらつしやいよ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それから二人は急に黙つてしまつていた。

僕はそういう二人の話を耳にはさみながら、九体<sup>くたい</sup>仏<sup>ぶつ</sup>をすつかり見おわると、堂のそと

に出て、そここの縁さきから蓮池のほうをいつしょに眺めている二人の方へ近づいていった。

僕は堂の扉を締めにいつた少女と入れかわりに、妻のそばになんといふこともなしに立つた

「もう、およろしいの？」

「ああ。」そう言いながら、僕はしばらくぼんやりと觀仏に疲れた目を蓮池のほうへやつていた。

少女が堂の扉を締めおわつて、大きな鍵を手にしながら、戻つてきたので、

「どうもありがとう。」と言つて、さあ、もう少女を自由にさせてやろうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまつせ。」少女は池の向うの、松林のなかに、いか

にもさわやかに立っている三重塔のほうへ僕たちを促した。

「そうだな、ついでだから見せて貰おうか。」僕は答えた。「でも、君は用があるんなら、さきにその用をすましてきたらどうだい？」

「あとでもええことだす。」少女はもうその事はけろりとしているようだつた。

そこで僕が先きに立つて、その岸べには菖蒲のすこし生い茂つている、古びた蓮池のへりを伝つて、塔のほうへ歩き出しだが、その間もまた絶えず少女は妻に向つて、このへんの山のなかで採れる筍だの、たけのこ松茸まつたけだのの話をことこまかに聞かせているらしかつた。

僕はそういう彼女たちからすこし離れて歩いていたが、実によくしゃべる奴だなあとおもいながら、それにしてもまあ何んという平和な気分がこの小さな廃寺をとりまいているのだろうと、いまさらのようにそのあたりの風景を見まわしてみたりしていた。

傍らに花さいでいる馬酔木あしひよりも低いくらいの門、誰のしわざか仏たちのまえに供えてあつた椿の花、堂裏の七本の大きな柿の木、秋になつてその柿をハイキングの人々に売るのをいかにも愉しいことのようにしている寺の娘、どこからかときどき啼きごえの聞えてくる七面鳥、——そういう此のあたりすべてのものが、かつての寺だつたそのおおかたが既に廃滅してわずかに残つてゐるきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら——というよ

りも、それらの古代のモニュメントをもその生活の一片であるかのようにさりげなく取り入れながら、——其処にいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもその何処かにすこしく悲愴<sup>ひそう</sup>な懷古的氣分を漂わせている。

自然を超えんとして人間の意志したすべてのものが、長い歳月の間にほとんど廃亡に帰して、いまはそのわずかに残つてゐるものも、そのもとの自然のうちに、そのものの一部に過ぎないかのように、<sup>とこ</sup>融け込んでしまうようになる。そうして其処にその二つのものが一つになつて——いわば、第二の自然が発生する。そういうところにすべての廃墟の云いしれぬ魅力があるのではないか？——そういうパセティックな考え方（それはたぶんジムメルあたりの考え方であつたろう）、いまの自分にはなんとなく快い、なごやかな感じで同意せられる。……

僕はそんな考えに耽りながら歩き歩き、ひとりだけ先きに石段をあがり、小さな三重塔の下にたどりついて、そここの松林のなかから蓮池をへだてて、さつきの阿弥陀堂のほうをぼんやりと見かえしていた。

「ほんまになあ、しよむないどこでおまつせ。あてら、魚食うしたことなんぞ、とんとおまへんな。<sup>わらび</sup>蕨みてえなものばっかり食つてんのや。……筍はお好きだつか。そうだつか。こ

のへんの筈はなあ、ほんまによろしうおまつせ。それは柔うて、やわうて……」

——彼女たちはそうやつて石段の下で立ち話をしたまま、いつまでたつてもこちらに上がつて来ようともしない。二人のうえには、何んとなく春めいた日ざしが一ぱいあたつている。僕だけひとり塔の陰にはいつているものだから、すこし寒い。どうも一人ともいい気もちそうに、話に夢中になつて僕のことなんぞ忘れてしまつてゐるかのようだ。が、こうして廃塔といつしょに、さつきからいくぶん瞑想的になりがちな僕もしばらく世間のすべてのものから忘れ去られてゐる。これもこれで、いい氣もちではないか。——ああ、またどこかで七面鳥のやつが啼いているな。なんだか僕はこのますこし気が遠くなつてゆきそうだ。……

その夕がたのことである。その日、淨瑠璃寺から奈良坂を越えて帰つてきた僕たちは、そのまま東大寺の裏手に出て、三月堂をおとずれたのち、さんざん歩き疲れた足をひきず

りながら、それでもせつかく此処まで来ているのだからと、春日のかすがの森のなかを馬酔木の咲いているほうへほうへと歩いて往つてみた。夕じめりのした森のなかには、その花のかすかな香りがどことなく漂つて、ふいにそれを嗅いだりすると、なんだか身のしまるような気がするほどだつた。だが、もうすっかり疲れ切つていた僕たちはそれにもだんだん刺戟かしけが感ぜられないようになりだしていた。そうして、こんな夕がた、その白い花のさいた間をなんということもなしにこうして歩いて見るのをこんどの旅の愉しみにして来たことさえ、すこしももう考えようともしなくなつてゐるほど、——少くとも、僕の心は疲れた身体とともにぼおつとしてしまつていた。

突然、妻がいつた。

「なんだか、この馬酔木と、淨瑠璃寺にあつたのとは、すこしちがうんじゃない？」  
これは、こんなに真つ白だけれど、あそこのはもつと房が大きくて、うつすらと紅味を帶びていたわ。……」

「そうかなあ。僕にはおんぬにしか見えないが……」僕はすこし面倒くさそうに、妻が手ぐりよせてゐるその一枝へ目をやつていたが、「そういうえば、すこうし……」

そう言いかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にぼおつとして

いる心のうちに、きょうの昼つかた、淨瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人での白い小さな花を手にとりあつて見ていた自分たちの旅すがたを、何んだかそれがずっと昔の日の自分たちのことでもあるかのような、妙ななつかしさでもつて、鮮やかに、蘇よみがえらせ出していた。

## 樅の上にて

そこの小屋のなかで待つていてくれと云われるまま、しばらく五六人の馴ぎよしや者らしい人たちの間に割りこんで、手もちぶさたそうに炉の火にあたつていたが、みんなの吹かしている煙草にむせて急に咳が出だしたので、僕は小屋のそとに出でていつて、これから自分のはいってゆこうとする志賀山の案内図をながめたり、小さな雪がちらちらとふっているなんかを何んとなく歩いてみたりしていた。雪の質は乾いてさらさらとしているし、風もないので、零下何度だか知らないけれど、寒さはそうひどく感ぜられなかつた。そのうちに、

向うの厩の中から、さいぜんの若い馴者が馬の口をとりながら、一台の雪櫛を曳き出して来るのが見えた。僕は雪櫛というものをはじめて見た。——粗末な箱型をしたものに、幌とはほんの名ばかりの、継ぎはぎだらけの鼠いろの布を被つただけのものである。馴者台なんぞもない。それもそのはず、馴者は馬のさきに立つて雪のなかを歩いてゆくのである。

その櫛が自分の前に横づけになつたものの、どこから乗つていいのか分からぬでまごまごしていると、馴者が飛んできて、幌をもちあげながら入口をあけてくれた。ふとそのなかに莫蘿の敷いてあるのが目にとまつたので、僕はいそいで靴をぬごうとすると、その儘あがれという。そこで僕はほんのまね事のように外套を叩いたり、靴の雪を払い落したりして、首をこごめるようにして幌の中にはいった。そのなかはまあ二人で差し向いに腰かけるのがやつと位だが、そこには座蒲団や毛布から、火鉢の用意までしてある。火鉢には火もどつさり入れてある。——寒いから、その火鉢に足をのせて、その上からその毛布をかけよと云つてくれる。そう云うとおりに、僕がそこにあつた毛布をひろげて膝の上にかけ出すのを見とどけると、馴者は幌をすつかり下ろして、馬のほうへ飛んでいった。

やがて雪橇は「ことん」とんと動き出した。あまり揺られ心ちのいいものではなかつた。それに幌には窓が一つもついていないので、全然おもての景色の見られないのが何よりの欠点だ。——このままこうして「ことん」とんと揺られながら、毛布の中に小さくなつていたんでは、いくら寒さはしのげても、なんにも見えず、わざわざ雪のなかもでやつてきたかいがない。そこで幌を少しもち上げてみたが、その位のことでは、道ばたに積みあげられた雪のほかは何んにも見えない。……

が、さつきから首すじがすこし寒いとはおもつっていたが、そののところだけ幌の布がなんだか綻んだようになつていて、ひらひらしているのにはじめて気がついた。ためしにそれをちょっと手でもち上げて見ると、小さな窓のような工合になる。僕はこれはいいとおもつて、そこに目を近づけると、ちょうど村の一番最後の家らしい、なかば雪に埋もれた一軒の茶店のようなものが通り過ぎた。ちよつとの間だつたのに、もうそうとう雪が深そうだ。

そのうちにあちこちの森だの山だのが見えて来る。細かい雪がいちめんにふりしきつて

いるので、それもほんの近いものだけしか見えなかつたが。……それでも、僕は自分が生れて初めて見るような雪の山のなかにはいり出していることを感じだしていた。だが、そうやつて外ばかり眺めていると、そこから細かい雪がたえず舞いこんでくるとみえ、膝のうえの毛布がうつすら白くなつていて。僕はその毛布を軽くはたきながら、すこし坐りなおして、しばらく目を休めることにした。なんにも見えなくとも、自分の身体のかしづかたで、上りが急になつたり、また、すこし楽になつたりしてゆく工合がよく分かる。なんだか自分の不安定の感じが或る度を過してくると、櫛のほうもいつか止まつてしまつて、馬が息をつくためにしばらく休むのである。雪の中にぽつんぽつんと立つてゐる樹木なんぞを見ても、四方から雪を吹きつけられているので、どのくらい雪が深いのだかちよつと見当がつかない。櫛道はちゃんとついているらしいが、ずっと上りづめらしく、馬も、馴者も、ずいぶん骨を折つてゐるのだろうと思つた。

又、櫛がとまつた。こんどはだいぶ長くとまつてゐるな、と思っていると、雪の中から急におもいがけない話しごえが聞えだした。どうやら向うから下りてくる雪櫛があつて、道をゆずりあつてゐるらしい。——「まだあとから来るか」と向うの馴者が問うと、「いや、もうこれが最後だ」とこちらの馴者が答えている。……そのうち僕の櫛が動きだ

して向うの櫂とすれちがおうとするとき、突然、向うの馄者が何かはげしく自分の馬を叱したので、ひよいと例の穴からのぞいて見ると、道を避けようとして片がわの積雪のなかへ深くはいり込んでしまった櫂を曳き出そうとして、一しよう懸命になつている馬は、ほとんど胸のあたりまで雪に埋つていた。なんども前脚を雪のなから引き抜こうとしてば、そこらじゅうに雪煙りをちらしていた。僕もそのとばつちりを受けそうになつて、いそいで顔をひつこめたが、向うの櫂はすっぽりと幌を下ろしてはいるものの、空のようだつた。続いて、もう一台の櫂とすれちがつた。こんどはどうやらうまくすれちがつたようだつたが、それも空らしかつた。

そうやつて二台の櫂とすれちがつて、しばらくしてから僕はふいと時計を出してみると、櫂に乗つてから一時間ばかりも経つてゐるので、ああ、もうこんなに乗つていたのかと意外におもいながら、一体、いまだのへんなのだろうと、又、例の穴に顔を近づけてみると、ちようど自分の櫂の通つてゐる岬の、ずっと下のほうの谷のようなところを二台の櫂がずんずん下りてゆくのが、それだけが唯一の動きつつあるものとして、いかにもなつかしげに見やられた。それにしても、あれがいましがた自分とすれちがつた櫂かとおもわれる位、そんなにもう下のほうまで往つてゐるのには驚いた。そうしてそれと共に、僕ははじめて

自分のいつのまにかはいり出している山の深さに気がついてきた。それほど自分のそれまでの視野のうちには、いつまで経っても、同じような白い山、同じような白い谷、同じような恰好をした白い木立しかはいって来ないでいたのだつた。

僕はそれから櫛のなかに再び坐りなおして、がたんがたん揺られるがままになりながら、いよいよ自分も久恋の雪の山に来ているのだなとおもつた。ずいぶん昔から、いまのようく、こうしてただ雪の山のなかにいること、——それだけをどんなに自分は欲して来たことだろう。べつに雪の真只中でどうしようというのでもない。——スバルティフになれない弱虫の僕は、ただこういう雪の中にじつとして、真白な山だの（——そう、山もそんなに大それたものでなくとも、丁度いま自分の前にあるような小品風なものでいい……）、真白な谷だの（——谷もあるの谷で結構……）、雪をかぶつたいくつかの木立のむれ（——あそこに立つている樺<sup>かば</sup>のような木などはなかなか好いではないか……）などをぼんやり眺めてさえいればよかつた。

ただすこし慾をいえば、ほんの真似だけでもいい、——真白な空虚にちかい、このよう  
な雪のなかをこうして進んでいるうちに、ふいと馭者も馬も道に迷つて、しばらく何処を  
どう通つているのか分からなくなり、気がついてみると、同じところを一まわりしてい  
たらしく、さつきと同じ場所に出でている——そんな純粹な時間がふいと持てたらどんなに  
好かろう、とそんな他愛のことだけが願わしいような、淡々とした気もちでいた。：

：

僕は目をつぶつて、幌の穴から見ようとすれば見えたでもあろう、そのような雪の世界  
をただ想像裡そうぞうりに描きつづけながら、こういう自分の雪に対するそれほど烈しくもない、  
といつて一時の氣まぐれでもない、長いあいだの思慕のようなものが、いつ、どうして自  
分のなかに生じて来たのだろうかと考え出していると、突然、十年ほどまえ八つが岳ふもと  
にあるサナトリウムで生を養つていた自分のすがたが鮮かによみ返つてきだした。冬にな  
ると、山麓さんろくのサナトリウムのあたりは毎日ただ生氣なく曇つてゐるだけなのに、山々は  
いつも雪雲で被われており、そんな雲のないときには、それらの山々は見事なほど真白な  
すがたをしていた。僕はそんな冬の日をどうしようもなしに暮らしながら、ときどき雪の  
山のほうへ切ない目ざしを向けるようになり出していた。そんな雪雲にすっかり被われて

いる山のもなかを、なにか悲壮な人間の内部でも見たいように、おそるおそる見たがりながら。……

僕は、いま、その頃の自分にはとても実現せられそうもないよう見えていた、こんな雪の中にはいり込んで来ているのだと思いながら、さて、べつにどうという感慨もなかつた。悲壯のようなものはいささかも感ぜられなかつた。寒さだつて大したことはない。むしろ、雪のなかは温かで、なんのもの音もなく、非常に平和だ。そう、<sup>たの</sup>愉しいといったほうがいい位だ。<sup>そり</sup>櫛の中にいて、小さな幌<sup>ほろ</sup>の穴から、空を見あげてみると、無数の細かい雪がしつきりなしに、いかにも愉しげな急速度でもつて落ちてくる。そうやつてなんの音も立てずに空から落ちてくる小さな雪をじいつと見入つてみると、その愉しげな雪の速さはいよいよ調子づいてくるようで、しまいにはどこか空の奥のほうでもつて、何かごおつといふ微妙な音といつしょになつてそれが絶えず涌<sup>わ</sup>いているような幻覚さえおこつてくるようだ。

大きな壺に耳をあててみると、その壺の底のほうからごおつといつて無数の音響が絶えまなしに涌きあがつてゐる。——ちようどああいつた工合に何か愉しくて愉しくてならぬいように、無数の小さな雪が空の奥のほうで微かにごおつという音を立てながら絶えず涌

いているような気がせられるのである。僕はいつまでも一ところからじつと、絶えず落ちてくる雪を見ている中に、そんな幻覚的な気もちにさえなり出していたが、急にまた坂にさしかかつたと見えて櫛ががたんがたん揺れだしたので、思わず自分自身に立ち返えされてしまっていた。

雪のごとく愉しかれ

大きいなる壺のやすらかに閉ざされし内部に在りて、  
すべての歌声の、よろこばしきアルペジオとなりて、  
絶えず涌きあがるがごとくにあれ。

そうしてそういうノワイユ夫人の詩の一節だけが、いつまでも自分の口の裡に、なにか永遠の一片のように残つていた。……

## 「死者の書」

古都における、初夏の夕暮れの対話

客 なんともいえず好い気もちだね。すこし旅に疲れた体をやすめながら、暮れがたの空をこうやつて見ているのは。

主 京都もいまが一番いいんだ。この頃のように澄み切った空のいろを見ていると、すっかり京都に住みついている僕なんぞも、なんだかこう旅さきにいるような気がしてきてならないね。まあ、そういう気もちになるだけでもいいからな……それにしても、君はこの頃はよくこちらの方へ出てくるなあ。いつか話していた仕事はその後はかどっているのかい。何か、大和のことを書くとかいったが……

客 いや、あれはあのままだ。なかなか手がかりがつかないんだ。まあ、そのうち何んとかものにするよ。……なんしろ、まだ、こういった感じのものが書きたいと、埴輪はにわをいじつたり、万葉の歌を拾い読みしたりしては一種の雰囲気を自分のまわりに漂わせて、ひとりでいい気になつてゐるぐらいのものだ。

……当分はまあ折を見ては、こうやつてこちらに来て、できるだけ屢々しばしばみごとな田園と化した都みやこあと址あとや、西の京あたりの松林のなかなどをぶらぶらするようにしている。

主 そうやつて君は何げなさそうにぶらぶらしながら、突然、松林の奥から古代の風景が君の前にひらけるような瞬間を待つてゐるわけなのだね。

客 そうだよ。少くとも、はじめのうちはそうだつた。だが、このごろはそういうた奇蹟あきらめは證めている。まだ、自分には古代の研究がなにひとつ身についていないのだからね。もうすこしおとなしく勉強をする。

主 だが、こんなことを僕から君に云うのもどうかと思うけれど、小説を書く氣なら、あんまり勉強しすぎてしまつてもいけないのでないかしら。ゲエテも、どこかで、こんなことを云つてゐる。『自分はギリシャ研究のおかげで「イフイゲニエ」を書いたが、自分のギリシャ研究はすこぶる不完全なものだつた。もしその研究が完全なものだつたら、自分の「イフイゲニエ」は書かれずにしまつたかも知れない。』

客 うん、なるほどね。つまり、古代のことは程よく知つてゐる位で、非常にういういしい憧れをもつてゐるうちのほうが小説を書くのにはいいということになるわけか。これは好い言葉をきいた。……どうもこのごろ、自分でも悪い癖がついたとおもい出していた

ところだ。日本の古代文化の上にもはつきりした痕あとを印しているギリシャやペルシヤの文化の東漸ということを考えてみていううち、いつか興味が動きだしてギリシャの美術史だとか、ペルシヤの詩だと読み出している。それはまだいい、そのうちにいつのまにかゲエテの「ディヴアン」だとか、ノワイユ夫人の詩集までが机の上にもち出されているといつた始末だ。

主　（同情に充ちた笑）まあ、ゆつくりでもいいから、あまり道草をくわずに、仕事に精を出したまえ。……そういうえば、数年まえに釈迦空さんが「死者の書」というのを書いていたではないか、あの小説には実によく古代の空気が出ていたようにおもうね。

客　そう、あの「死者の書」は唯一の古代小説だ。あれだけは古代を呼吸しているよ。

まあ、ああいう作品が一つでもあってくれるので、僕なんぞにも何か古代が描けそうな気になつてているのだよ。僕ははじめて大和の旅に出るまえに、あの小説を読んだ。あのなかに、いかにも神秘な姿をして浮かび上がっている葛城かつらぎの二上山ふたがみやまには、一種の憧れさえいだいて来たものだ。そうして或る晴れた日、その麓ふもとにある当麻寺たごまでらまでゆき、そのこごしい山を何か切ないような気もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村々を遠くにながめながらぶらぶらしていたこともあった。

主 その二上山だ。その山に葬られた貴い、お方の亡き骸が、塚のなかで、突然深いねむりから村びとたちの魂乞たまごいによつて呼びさまされるあたりなどは、非常に凄かつたね。森の奥の、塚のまつくならな洞のなかの、ぼたりぼたりと地下水が巖づたいにしたたり落ちてくる湿つぼさまでが、何かぞつとするようく感ぜられた。

客 全篇、森厳なレクヰエムだ、古代の埃及エジプト及びとの数種の遺文に与えられた「死者の書」という題名が、ここにも實にいきいきとしている。

主 每日の写経に疲れて、若い女主人公がだんだん幻想的になつて来、ある夕方、日の沈んでゆく西のほうの山ぎわにふと見知らない貴いおかたの佛おもかげを見いだすところなども、まだ覚えている。

客 あの写経をしている若い女のすがたは美しいね。僕はあそこを読んでからは女の手らしい古い写経を見るごとに、あの藤原の郎いらつめ女の氣高くやつれた容子ようすをおもい出して、何んとなくなつかしくなる位だ。

主 あの小説には、それからもう一つ、別の興味があつた。大伴家特おおとものやかもちだ。柳の花の飛びちつている朱雀大路すざくおおじを、長安かなんぞの貴公子然として、毎日の日課に馬を乗りまわしている兵部大輔ひょうぶたいふの家持たののすがたは何ともいえず愉快ふじわらのなかまろいし、又、藤原仲麻呂ふじわらのなかまろがその

家持と支那文学の話などに打ち興じながら、いつか話題がちかごろ仏教に帰依した姪の郎らつめ女のうえに移つてゆく会話なども、いかにもいきいきとしていたな。

客 そういうところに作者の底力がひとりでに出ている。人間として大きな幅のある人だ。

主 一方、万葉学者としてもつとも独創に富んだ学説をとなえてきた、このすぐれた詩人が、その研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うたところに、あの作品の人性ヒトテがあるのだね。だが、どうしてあれほどのものが世評に上らなかつたのだろう。

客 世間はそういう仕事は簡単にディレッタンティズムとしてかたづけてしまうのだ。学界の連中は、こんどは小説という微妙な形式なので、読まずともいいとおもつたろうしどうし……本当にこの作品を読んだという人は、僕の知っている範囲では、五人とはいなかつたものね。

主 僕などもその一人だつたわけか。幸福なる少数者の……しかし、それはそれだ。君もいい仕事をしてくれたまえ。いい読者になつてあげるから。

客 こんどはこつちに風が向いてきたな。まあ、もうすこし待つてくれ。まだ自分でもしようがないとおもうのは、大和の村々を歩いていると、なんだかこう、いつもお復習さらいを

させられているような気もちが抜けないことだ。もうすこし何処にいるのだかも忘れたようになつて、あるときは初夏の風にふかれながら、あるときは秋の雲をみあげながら、ぽんやりと歩けるようになりたい。——心におそろしげに描いてきた神々のいられた森が何かつまらない小山に見えるきりだつたり、なにげなく見やつていた或る森のうえの塔に急に心をひかれ出して暑い田圃たんばのなかを過ぎよつていつたり、或る大寺の希臘風ギリシアぶうなエンタシスのある丹にのはげた円柱を手で撫でながら、目のあたりに見る何か大いなるものの衰えに胸を圧しつぶされたり、そうかとおもうと、見すてられたような廃寺の庭の夏草の茂みのなかから拾い上げた瓦かわらがよく見ると明治のやつだつたりして、すつかりへとへとなつて、日ぐれ頃、朝からみると自分の仕事からかえつて遠のいた気もちになつて帰つてくることが多いのだ。

主 そういうつた君の日々が、そのまで君の小説になるのではないか。

客 いや、もうそういう苦しまぎれのような仕事はこんだけはしたくない。もつと、こう大どかな仕事ぶりをしてみたいんだ。だが、僕みたいなものには難しいことらしいな。——あれは、おどとしの秋だつたかな、ともかくもまあ小手しらべにと、何か小品を、ちようど古代の人々がふいとした思いつきで埴輪はにわをつくりあげたような気もちで、書いてや

ろうとおもつて、古代の研究がてら、大和にやつてきて、毎日寺々を見て歩いているうちに、なんだか日にまし気もちが重くるしくなつて、とうとう或る夕方、もうその仕事をどう云つてやつてことわろうかと考えるため散歩にいつた高畑のあたりの築土のくずれが妙にそのときの自分の気もちにぴつたりして、それから急に思いついて「曠野」<sup>あらの</sup>という中世風なものがなしい物語を書いた。

主　あの小説は読んだよ。大和までわざわざ仕事をしにきて、毎日お寺まわりしながら、やつぱり、ああいうものを書いているなんて、いかにも君らしいとおもつたよ。

客　あれは、いまおもえば、僕のさびしい詮めあきらめだつた。それが何処かで、あの物語の女のさびしい気もちと触れあつていたのだな……

主　そういうえはそもそもいえようが、あれもあれでいい。だが、僕は君の新らしい仕事を期待している。勇気を出して、いつまでもその仕事をつづけてくれたまえ。

客　うん、ありがとう。ひとつ一生をかけてもやるかな。……それまでのうちに、これから何遍ぐらいこつちにやつて来ることになるかな。どうも大和のほうに住みつこうなんという気にはなれない。やつぱり旅びととして来て、また旅びととして立ち去つてゆきたい。いつもすべてのものに対してニイチエのいう「遠隔の感じ」<sup>パトス・デル・ディスタンツ</sup>を失いたくない

のだ。……

そのくせ、いつの日にか大和を大和ともおもわず、ただ何んとなくいい小さな古國ふるくにだとおもう位の云い知れぬなつかしさで一ぱいになりながら、歩けるようになりたいともおもつてているのだ。たわわに柑橘類かんきつるのみのつた山裾をいい香りをかいで歩きながら、あこれも古墳のあとかなと考え出すのは、どうもね。

主 しかし、君はもう大抵大和路は歩きつくしたろうね。

客 割合に歩いたほうだろうが、ときどきこんなところでと、——本当に思いがけない  
ような風景が急に目のまえにひらけ出すことがある。

この春も春日野のかすがの馬酔木あしびの花ざかりを見て美しいものだとおもつたが、それから二三日後、室生川の崖のうえにそれと同じ花が真っ白にさきみだれていのをおやと思つて見上げて、このほうがよっぽど美しい気がしだした。大来皇女のおおくのひめみこばんかの挽歌にある「石のうへに生ふる馬酔木を手折らめど……」の馬酔木はこれでなくてはとおもつた。そういう思いがけない発見がときどきあるね。まあ、そんなものだけをあてにして、できるだけこれらも歩いてみるよ。——だが、まだなかなか信濃の高原などを歩いていて、道ばたに倒れかかっている首のもぎとれた馬頭観音などをさりげなく見やつて、心にもとめずに過ぎて

ゆく、といったような気軽さにはいかない。……

それでいて、そのふと見過ぎしてきた首のない馬頭観音の像が、何かのはずみで、ふいと、そのときの自分の旅すがたや、そのまわりの花薄<sup>はなすすき</sup>や、その像のうえに青空を低くさらさらと流れていた秋の雲などと一しょになつて、思いがけずはつきりと蘇<sup>よみがえ</sup>つてくるようなことがあつたりする工合が、信濃路ではたいへん好かつた。なんだか、そういうつたうつけたような気分で、いつの日か、大和路を歩けるようになりたいものだ。

主 いい身分だね。そうやつて旅行ばかりしていられるなんて。

客 君なんぞにもそう見えるのかい。でも、僕はこんな弱虫だからね、不安な旅でない旅などをしたことはない。いつ、どこで、寝こむかも分からぬ心細さで、旅に、出てくるのだよ。まあ、それなりにだんだん旅慣れてはきたけれど。……

主 そうか。あんまり無理をするなよ。——ああ、もうすっかり暗くなつてしまつたね。すこし冷え冷えとしてきたようだから、窓をしめようね。



## 青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」 小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第3巻」 筑摩書房

1977（昭和52）年11月30日初版第1刷発行

初出：「大和路・信濃路」は「樹下」「十月」「古墳」「斑雪」「辛夷の花」「淨瑠璃寺」「櫛の上にて」「死者の書」の八篇から成る。

「樹下」：「文藝」

1944（昭和19）年1月号

「十月（一）」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「1」として。）

1943（昭和18）年1月号

「十月（二）」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「1」として。）

1943（昭和18）年2月号

「古墳」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「1」として。）

- 1943（昭和18）年3月号  
「斑雪」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「野辺山原」として。）
- 1943（昭和18）年4月号  
「櫛の上にて」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「雪」として。）
- 1943（昭和18）年5月号  
「辛夷の花」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「辛夷の花」として。）
- 1943（昭和18）年6月号  
「淨瑠璃寺の春」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「淨瑠璃寺」として。）
- 1943（昭和18）年7月号  
「死者の書」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「死者の書」として。）
- 1943（昭和18）年8月号  
一部所収単行本：「曠野」養徳社（「死者の書」「斑雪」「櫛の上にて」の3篇所収）
- 1944（昭和19）年9月20日  
一部所収単行本：「花あしひ」青磁社（「樹下」「十月」「古墳」「淨瑠璃寺の春」「死者の書」の5篇所収）

1946（昭和21）年3月15日

一部所収単行本：「堀辰雄小品集・繪はがき」角川書店（「斑雪」「横の上にて」「辛夷の花」の3篇所収）

1946（昭和21）年7月20日、

全編初収単行本：「大和路・信濃路」人文書院

1954（昭和29）年7月5日

※筑摩全集版の底本は、「樹下」「十月」「古墳」「淨瑠璃寺の春」「死者の書」は「花あしひ」青磁社。「斑雪」「横の上にて」は「曠野」養徳社。「辛夷の花」は「堀辰雄小品集・繪はがき」角川書店版。加えて、「大和路・信濃路」人文書院を参考にしている。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房、1977（昭和52）年11月30日、解題による。

入力・kompass

校正・松永正敏

2004年2月27日作成

2010年11月2日修正

### 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 大和路・信濃路

## 堀辰雄

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>